

## 『台記』注釈

久安六年正月

原水民樹

## 凡例

一、『台記』は藤原頼長の日記である。『槐記』『宇槐記』『宇治左府記』『宇左記』『治相記』などとも呼ばれる。

一、家蔵本を底本とする。書誌を略記する。外題は、表紙中央に打付書にて「台記〔別記〕 年次 通し番号」。表紙は香色地に青色・茶色の波形を四本引く。袋綴。楮紙。寸法二九・七×二一・三。一面八行。各冊墨付第一丁表右肩に「日野吉田／家蔵書」の朱長印。目録一冊、本記十二冊、別記九冊の全二十二冊。内訳は本記一（康治元年）、二（康治二年）、三（康治三年）、四（天養二年）、五（久

安二年）、六（久安三年）、七（久安四年）、八（久安六年）、九（久安六年）、十（久安七年）、仁平三年）、十一（仁平四年）、十二（久寿二年）、別記一（長承四年・康治元・二年）、二（久安三年）、三（久安四・六年）、四（久安五・六年）、五（久安六年・仁平元年）、六（仁平元年）、七上（仁平二年）、七下（仁平三年）、八（久寿二年）。

一、原文（校異を含む）は一箇月分の注釈の末尾に一括して掲げる。

一、後掲の写本（末尾（ ）内は小稿で使用する略号）を対校し、また増補史料大成本を参照する。ただし、これら写

本は厳密な本文調査により選んだものではない。従って、原形の忠実な復元を目的としてはいない。

○京都大学附属図書館蔵平松家旧蔵本（平松三門／ター

三）（平）

○同蔵十六冊本（五—〇四／タ／三）（京）

○宮内庁書陵部蔵天明書写本（二六五—一〇〇九）（書二）

○同蔵二十一冊本（三五三—一七〇）（書二）

○同蔵享保書写本（柳四四七）（書三）

○国立公文書館内閣文庫蔵二十一冊本（二六一—五四）（内

一）

○同蔵坊城家旧蔵本（一六一—五七）（内二）

○東京大学附属図書館蔵三条実憲寄贈本（G 二七—二二

六）（東）

○東洋文庫蔵本（三—H—a—へ—31）（洋）

○三手文庫蔵本（手）

○大和文華館蔵本（大）

○前田育徳会尊経閣文庫蔵『宇槐記抄』（宇）

○国立公文書館内閣文庫蔵『久安五六年日次記』（久）

一、校訂により底本の本文を改める部位については数字を傍記し、その具体を注記する。その際、一本のみの本文に従う場合はその伝本名を略号で示すが、二本以上の本文に従う場合は他本と記す。また、一つの本文に確定しがたい場合はその旨を記す。さらにいずれの伝本にも依らず私に置き換える場合もある。

一、改行他の体裁については必ずしも底本通りとせず適宜処理する。

一、底本における割書は（ ）の形で示す。また、割書中の更なる割書は（ ）の形で示す。

一、書き下しには歴史的仮名遣いを用いる。また、読解の便を考慮して適宜振仮名を付す。訓法が分からない場合は原文のままとし注記する。なお、書き下しについては、増補史料大成本を参考にする。

一、書き下しは専ら私意によるものであり、漢文訓読研究の成果を正確に踏まえたものではない。

一、古体・異体・俗体の文字は原則として通行の字体に改めるが、そのままする場合もある。印字のできない文字は「別字」とのみ表記する。

一、『公卿補任』登載者並びに『平家物語研究事典』（明治書院）、『平家物語大事典』（東京堂出版）、『国史大事典』（吉川弘文館）、『平安時代史事典』（角川書店）、『平安人名辞典』（和泉書院）等に立項されている人物についての注は原則として簡略にする。また、新日本古典文学大系『保元物語 平治物語 承久記』付載「人物一覧」に詳しい説明がある場合はその由を注記する。上記以外で、久寿二年の注釈（『徳島大学言語文化研究』（第十・十三巻 平成十五・十七年）掲載）で取り上げた人物については、該当注の存在する月日を示し、これに譲る。

一、語釈は、主として『平安時代史事典』（角川書店）、『有職故実大辞典』（吉川弘文館）、『国史大事典』（吉川弘文館）、『古語大辞典』（角川書店）、『日本国語大辞典』（小学館）等の記載に従う。

一、著名な社寺や耳慣れている官職等については注記しない。  
一、通称や官職名で記される人物については、初出の時点で注を施し、再出以降は実名を傍記する。

一、他文献の引用に際しては、漢文は原則として書き下しに改め、適宜振り仮名を付す。

久安六年曆 庚午歲 凡三百五十四日 生年三十一

正月小 戊寅

一日 己卯 去夜雨雪。深さ七八寸許り。今日、今麻呂（1）昇殿を聴さる。早朝、諷誦（2）を修す（石清水・賀茂・平野・春日・大原野・吉田・祇園・角振・隼（3）・興福寺・極楽寺（4）・法性寺（5）・法興寺（6）・法成寺（7）・平等院、已上氏寺（8）、延暦寺・広隆寺・清水寺・六角堂（9）。昇殿の事に依るなり。巳の刻に参議教長（10）卿来たりて（直衣）名簿を書く（11）（先日、成佐（12）之を扱ふ。光長・隆長・親長）。

蔭子<sup>おんし</sup> (13) 藤原朝臣隆長 左大臣の子 久安六年正月一日  
巳<sup>み</sup>の刻に法皇 (14) 番<sup>ばん</sup> 長兼頼<sup>ちやう</sup> (15) をして移<sup>うつ</sup> 馬<sup>うま</sup> (16) を  
兼長<sup>かねちやう</sup> (17) に借し賜ふ。余、恐悦の由を奏す。午の刻に余東<sup>とう</sup> 帶<sup>そくたい</sup>  
了んぬ。子の時に右大将実能<sup>ね</sup> (18) 卿<sup>え</sup> (烏帽<sup>えぼ</sup>・直衣<sup>なほし</sup>・浅黄<sup>あさぎ</sup>の  
指貫<sup>さしぬき</sup>) 来たり。今麻呂<sup>いままろ</sup>の装束の総角<sup>あけまき</sup> (19) す (但し、右大将<sup>実能</sup>  
之を役す。其の総角<sup>あけまき</sup>先日兼忠<sup>かねちゆう</sup> (20) を催す。而れども右大将  
役を請ふ。仍りて兼忠を止む)。此の間頭<sup>しやう</sup> 公通 (21) 朝臣来  
たり。名簿<sup>みやうぶ</sup>を付けて之を奏せしむ。是より先に陰陽権博士<sup>おんやうこんはかせ</sup>  
泰親<sup>たいしん</sup> (22) を侍<sup>さぶらひ</sup> 所<sup>ところ</sup> (23) に召す。吉時を問はん為なり。  
而れども忘却して之を問はず。総角<sup>あけまき</sup>了りて卿等の来たるを待  
つ。此の間小舎人<sup>こじねり</sup> (24) 昇<sup>しょう</sup> 殿<sup>でん</sup>を告ぐ。禄を賜ふこと常の如  
し。未<sup>ひつじ</sup>の刻に及びて新中納言<sup>しんちゆうなげり</sup> (忠基<sup>ちゆき</sup>) (25) ・宰<sup>さい</sup> 相中<sup>さうちゆう</sup> 将<sup>しやう</sup> (教  
長<sup>けいちやう</sup>) (26) 来たり。即ち門外に於いて乗車し (新中納言在るに  
依るなり。今麻呂<sup>いままろ</sup>車の後に在り)、院<sup>いん</sup> (鳥羽<sup>とりは</sup>) (白川押小路末の離  
宮<sup>りきゆう</sup> (27) に参る。公能<sup>こうのう</sup> (28) ・忠基<sup>ちゆき</sup>・教長<sup>けいちやう</sup>・兼長<sup>かねちやう</sup> (前驅三人、  
府の番<sup>ばん</sup> 長車<sup>ちやう</sup>の前に在り) 等卿車を連ぬ (後に聞く。忠基の  
命に依りて兼長の車前に在り。兼長固辞するも忠基之を強い

る)。今麻呂<sup>いままろ</sup>殿上の口に立つ (余及び四卿同所を徘徊す)。公  
能卿<sup>みやうぶ</sup>名簿<sup>なぼ</sup>二通を判官代頭遠<sup>とほ</sup> (29) (両院<sup>りやういん</sup> (30) の判官代を兼  
ぬ。仍りて両<sup>りやう</sup> 院<sup>いん</sup>の名簿<sup>なぼ</sup>を付く) に付く。先に院<sup>いん</sup> (鳥羽<sup>とりは</sup>) の簡<sup>かん</sup>  
を付く (31) (須<sup>すべから</sup>く名簿<sup>みやうぶ</sup>下りて後に之を付くべし。而れど  
も遅引を恐るるに依りて先に之を付く)。今麻呂<sup>いままろ</sup>及び三卿殿上  
に着す (余及び兼長之に着さず)。蔵人<sup>くらうど</sup>候せざるに依りて、  
六位判官代之を付く。此の間右内兩府<sup>みぎうちりやうふ</sup> (32) 参入す。両方押  
礼<sup>り</sup>了んぬ。女院<sup>めい</sup>の簡<sup>かん</sup>を付く。余及び両<sup>りやう</sup> 相<sup>さう</sup> 府座<sup>ふざ</sup>に在り。  
仍りて其の許を蒙りて童子<sup>こ</sup>を召し着せしむ。蔵人<sup>くらうど</sup>簡<sup>かん</sup>を付け  
了んぬ。頭遠童子<sup>とほと</sup>を伝へ召す。御前に参る。退下して後同車  
し、新院<sup>しんいん</sup> (33) に参る (暗に及ぶ)。公能卿<sup>こうのう</sup>、別当信輔<sup>べつたうしんぷ</sup> (34)  
朝臣<sup>あそ</sup>をして名簿<sup>なぼ</sup>を奏せしむ。蔵人<sup>くらうど</sup>簡<sup>かん</sup>を付く。次いで押礼<sup>し</sup>  
了んぬ。太相府<sup>たいしやうふ</sup> (35) に参り、伊通<sup>いと</sup> (36) 卿に問ひて曰く、公<sup>き</sup>  
未<sup>み</sup>だ准<sup>じゆん</sup> 后<sup>こう</sup>の宣旨<sup>せんし</sup> (37) を蒙らず。両<sup>りやう</sup> 方<sup>かた</sup>の押賀未<sup>み</sup>だ前後  
詳ならず。之を如何せん、と。答へて曰く、宜しく主<sup>しゆ</sup> 公<sup>き</sup>の処<sup>ところ</sup>  
分<sup>ぶん</sup>を取るべし、と。即ち資憲<sup>しげのり</sup> (38) をして之を取らしむるに、  
公等計らひ決すべきの報有り。伊通<sup>いと</sup>・成通<sup>せいと</sup> (39) 両卿に問ふ

に、疑を持ちて未だ決せず。此の間、主(忠通)公いままろ今麻呂をして拝賀を催さしむ。兩(伊通・成通)卿曰く、大外記師業(40)朝臣参候す。

宜しく尋ね決せらるべし。てへれば資憲をして之を問はしむるに、申して曰く、准(忠通)后じゆこう尊しと雖も尊卑を論ずるに未だ摂政に勝るを得ず、てへり。申す所未だ其の理を得ず。而れども夜更に漸く深し。客卿疲倦す。余おもへらく家に於いては夫妻に尊し。縦(忠通)ひ准(忠通)后じゆこう摂政に尊しといへども夫を先にし妻を後にするは其の理有り、と。即ち起座して資憲をして候する由を主(忠通)公に申さしむ。可許の後、庭中に進みて再拝し了りて帰り入る。雅国(41)朝臣(准后の職事)をして小君に申さしめ、初めの如く再拝す(准后拝賀の有無、先日処分を太相公に請ふ。)公(忠通)、謙退して之を辞す。余、卿等に示し告げ、強(忠通)ちに以て拝賀す。明日、公(忠通)、書を与へ悦謝す。了りて高陽院(42)に詣で御前に参る(兼長・今麻呂同じ)。童子ふた簡かやのあんを付く(先に成隆(43)名簿を蔵人に付けて啓上せしむ)。後に参内し、太后(44)の御在所に詣づ。今麻呂恩喚に応じて簾中に入り、諸卿と共に拝賀し、了りて殿上に着す。今麻呂之

に同ず(火爐の下)。藏人右少弁範家(45)簡ふだを付けて後、今麻呂御前に参る(頭為通(46)朝臣扶持す)。次いで小朝拝

(47)兼長未だ昇殿(忠通)を聴ゆるされず。之に立つは失なり。次いで、笏紙しやくしを押し(48)左さ仗(49)に着す。節会せちあひの儀常の如し。元子(50)に着さんと欲するの間雨雪。仍りて範家を装束を改むべきの由を奏せしめ、同弁に仰す(装束の弁候せず)。諸卿昇殿(兼長之に同じ)後、入御。疾と称し、中納言公教(51)卿の笏しやくを取り替へ、兩(兼長・今麻呂)息を伴ひて帰家す(公教卿辞して曰はく、近代中納言奉仕の例無し、と)。余曰はく、道方(52)中納言あなが為りて之を奉仕す、と(前二条関白(53)の譲り)。是已に中古の例なり。強(忠通)ちに笏を替へて退出す。兼長、大將(実能)の廬(54)東面(鳥羽)に向かふ。次將(55)、元(56)三(56)に大將家に向かふ礼なり。院(鳥羽)の御み厩まや舎人とねり居飼(57)に禄を給ひ、御馬を返し献じ了んぬ。翌日、左金吾(58)公教(58)に、清職(59)をして笏しやく・笏紙等しやくしを還すべからざるの状を示さしむ(先例に依るなり(60))。別記(61)四方しほう拜(62)無き事召し無きと雖も吉服を

着して節会に参る事 初めて笙（63）を吹く事 齒堅（64）に魚類を用ゐざる事（愛敬鮎（65）を差めず） 鏡を見心喪服（66）を着する事 節供の事（魚を羞むるは家司（67）の失なり）（68） 除服後初の出仕に申文（69）無き事

【注】

- （1）今麻呂 頼長の三男の幼名。この日、隆長と改名。久安二年（一一四六）に頼長の嫡室幸子の養子となる（『台記』該年三月十九日条）。生年については『台記』に見られるが、御橋惠言『保元物語注解』の考証に従い、永治元年（一一四一）とすべきである。これに依れば久安六年時は十歳。

（2）諷誦 経文などを誦誦すること。

（3）角振・隼 東三条殿の一角に祀られる神で、頼長も折につけ参拝している。永延元年（九八七）に従四位下を授けられている。頼長の父忠実の言談を筆録した『中外抄』には「朝隆の申して云はく、『東三条の角振・隼明

神は、帝王名は覚えずの御後靈なり、聖人はまた後身なりと。件の事は実なるか』と。仰せて云はく、『知ろし食さざる事なり。隼明神は春日の王子なり。また、尾州熱田の御坐なり』と。」とある。また、『春日社記』に「当社春日御殿内若宮起」として「海本門（明神意）隼明神是也。」「椿明神。角振明神是也。」と見える。

（4）極楽寺 藤原基経が着手し、息の時平が完成させた寺院。

（5）法性寺 藤原忠平が創建した寺院。

（6）法興寺 法興院か。そうであるなら、藤原兼家が東二条院を寺院化したものを起源とする。後に積善寺とまとめた。

（7）法成寺 藤原道長が贅を尽くして建てた寺院。『徒然草』は、その荒廃の様を記す。

（8）氏寺 藤原氏の氏寺については、杉山信三『藤原氏の

氏寺とその院家』（吉川弘文館 昭和四十三年）に詳しい。

（9）六角堂 正称は紫雲山頂法寺。平安京内に建立された

最初の私寺とされる。如意輪観音を本尊とし、多くの信仰を集め、頼長も度々参詣している。「夜に入りて六角堂に参る。三ヶ年四季一度参るべき願を遂げ了んぬ。」(『台記』康治元年十二月二十九日条)、「今晚、皮堂・六角堂に詣づ。毎月皮堂詣で、四季六角堂詣で、去年了んぬ。」(同記久安四年十月十日条)。

(10) 教長 大納言正二位藤原忠教の息。崇徳院の側近として知られ、頼長とも親しかった。左京大夫正三位に至るが、保元の乱で常陸配流、応保二年(一一六二)召還。

永治元年(一一四一)十二月二日任参議。

(11) 名簿みやうぶを書く 今麻呂昇殿のため朝廷等に提出する名札を書いた。悪筆の頼長は、能筆で知られる教長に名簿の清書を依頼したのだろう。

(12) 成佐 駿河守従五位下藤原行佐の息。秀才・文章得業生・雅楽助等(『台記』を経て、天養二年(一一四五)正月七日任藏人(『台記』)。彼が藏人になってからは「禁中」が「古風」に復したという(『台記』三月二十三日条)。

久安三年(一一四七)正月五日式部丞の労により叙爵(『本朝世紀』、同二十八日任甲斐權守(『本朝世紀』、二月五日頼長家の家司(『台記』、四年正月二十八日任式部權少輔(『台記』『本朝世紀』、六年八月十九日崇徳院昇殿(『台記』、七年正月一日死去(『台記』『本朝世紀』。時に式部少輔兼出雲權守(『本朝世紀』。頼長の漢学の師であり、頼長に替わり彼の苦手な詩・和歌を作っている(『台記』天養二年三月十七日、久安二年十一月一日条等)。また、癰瘍の治療法を部下で試みようとした頼長を君子の所業に非ずと諫めた(『台記』康治元年九月九日条)。成佐の病臥に際して、頼長は平癒の祈祷を行っている(『台記』久安六年十一月七日条)。また、病床を見舞おうとし、その死に際して出仕を控えようとしたが、いずれも父の忠実に制止された(『台記』久安六年十二月十八日、七年正月四日条)。漢学に力を注ぎ、仏道を軽んじたため、死後は地獄に落ちたとの説話が生まれた(『古今著聞集』巻第十三 哀傷 第廿一・『続古事談』巻第二)。

(13) 蔭子 おんし 官界における父親の恩恵を受けて官人となる資格を得た者。

(14) 法皇 鳥羽院。堀河の皇子で、崇徳・後白河・近衛三帝等の父。

(15) 兼頼 秦兼弘の息。↓久寿二年五月七日条の注(2)(七三頁)。番長は、ここでは右近衛府に属し警護にあたる下級役人の長。

(16) 移馬 うつしうま 馬寮が管理し、乗り替え用もしくは引馬として使用する馬。

(17) 兼長 頼長の嫡子。この時、非参議右中将従三位。十三歳。

(18) 実能 権大納言正二位藤原公実の息で、左大臣従一位に至る。頼長の嫡室幸子の父。保延五年(一一三九)十二月十六日兼右大将。『中外抄』には、頼長が舅である実能に対し「事の外に悪くあたった」との忠実の言を載せる。

(19) 総角 あげまき 少年の晴れの場合における髪形。伝聖徳太子像が

よく知られている。

(20) 兼忠 和泉守従五位上藤原道経の息。保延三年(一一三七)二月五日任陸奥権守(『中右記』)。「陸奥権守兼忠(道経の子、頭綱の孫。其の業(総角の理髪法―原水注)を伝ふ)」「『台記』天養二年正月四日条」と見え、頼長の嫡子兼長、次子師長の初参・昇殿の際、兼忠が総角を奉仕している(『台記』上掲日条・『兵範記』久安五年十月十六日条)。

(21) 頭公通 とう 権中納言正三位藤原通季の息。権大納言正二位に至る。頭は藏人頭で久安五年(一一四九)七月二十八日任。

(22) 泰親 安倍泰親。↓久寿二年四月二十七日条の注(7)(三二頁)。

(23) 侍所 さむらいどころ 皇族や上級貴族等の邸における近習の詰所。

(24) 小舎人 こじんねり 藏人所で雑事に従う者。

(25) 忠基 藤原忠教の息で教長の兄。権中納言太宰権帥正



三位に至る。久安五年（一一四九）七月二十八日任權中納言。

(26) 宰相さいしやう中将ちゆうかう（教長） 宰相は参議の唐名。保延四年（一

一三八）十一月右中将還昇。

(27) 白川押小路末の離宮 金剛勝院御所、押小路殿と呼ば

れた。鳥羽院の御所で、美福門院得子が伝領し、この御所で死去した。

(28) 公能 藤原実能の息で、頼長の嫡室幸子の弟。右大臣

正二位に至る。頼長は公能の娘多子を養女とし近衛天皇に入内させることで政權の座を狙う。久安六年時、公能は權中納言兼右兵衛督正二位。

(29) 顯遠 因幡守藤原長隆の息。權中納言従二位に至る。

保元元年（一一五六）八月二十二日に顯時と改名。久安六年時は甲斐守兼勘解由次官正五位下。

(30) 兩院 鳥羽院とその皇后美福門院得子。得子は權中納

言正三位藤原長実の娘で当今近衛の母。久安五年（一一四九）八月三日院号を受ける。

(31) 簡ふだを付く 簡ふだは日給ひだまひのふだ間。出勤者の確認のために用

いた木簡で、在籍者の官位・姓名を記したもの。『侍中群要』（第九）に「凡そ昇しょうでん殿を聴すは、別当勅を奉りて

藏人頭に伝へ宣す。即ち宣旨を書く。而して後慶賀を奏せしむ。拝舞して殿に昇り、即ち以て簡を附く。」とある。

(32) 右内兩府 右府（右大臣）は藤原実行。權大納言正二位公実の息で、太政大臣従一位に至る。内府（内大臣）

は源雅定。太政大臣従一位雅実の息で、右大臣正二位に至る。ともに久安五年（一一四九）七月二十八日当官に任。雅定については「性戯れを好みて常に言ひ咲ふ」（『台記』天養二年三月七日程）と見える。

(33) 新院 崇徳院。鳥羽の第一皇子で、当今近衛の異母兄。

永治元年（一一四一）讓位。

(34) 信輔 中納言従二位藤原経忠の息。右馬頭等を経て、

久寿三年（一一五六）二月二日任右京大夫（『兵範記』『山槐記』）。また、能登權守、淡路守、若狭守、駿河守、武藏守、因幡守等を歴任（『国司補任』）。『兵範記』『本朝世

紀』等に崇徳院別当と見える。

(35) 太相府 だいしやうふ 藤原忠実の嫡男で頼長の異母兄の忠通。太

相府は太政大臣のことで、久安五年（一一四九）十月二十五日任。

(36) 伊通 権大納言正二位藤原宗通の息。太政大臣正二位

に至る。この年、娘皇子を忠通の養女にして近衛天皇に入内させ、頼長の多子入内に対抗する。

(37) 准后の宣旨 じゆんごう 租税を得たり任官・叙位の推薦権を持つ

ことを、三后（太皇太后・皇太后・皇后）に準じて天皇から許される待遇。忠通は准后の宣旨を受けていないが、嫡室の宗子（宗通の娘）は崇徳院の中宮聖子の母として久安五年十月十六日に准后の宣旨を受けていることを言う。

(38) 資憲 権中納言従二位藤原実光の息。天治元年（一一

二四）十二月二十八日給料。以後、検非違使・藏人にて大治四年（一一二九）正月六日叙爵、長承元年（一一三二）二月二十八日叙従五位上、同三年三月十九日兼皇后

宮権大進、同四年四月九日叙正五位下（以上『中右記』、

下野守、紀伊権守、隠岐守等を歴任（『国司補任』）、天養元年（一一四四）十二月三十日下野守辞職（『本朝世紀』、

久安三年（一一四七）六月二十八日勘解由次官復任（『本朝世紀』）。弟の資長に右少弁を越えられたり（『台記』久

安六年四月二十八日条）、学問料試に病を構えて欠席している（『宇槐記抄』仁平三年五月二十一日条）ことなどよ

りみて、父の事績を継いで権中納言正二位文章博士になつた弟の資長に比し凡庸だったか。『尊卑分脈』に「崇徳

院御事」（保元の乱を指す）に依り出家した由が見えるが、これは、彼が崇徳院別当（『兵範記』仁平二年二月十三日

条裏書）であり、院の女房阿波との間に俊光を儲けている（『兵範記』久寿三年正月七日条）縁に因るものだろう。

(39) 成通 藤原宗通の息で伊通の弟。大納言正二位に至る。

この時、権大納言正二位。

(40) 師業 中原師安の息。本名師長。久安四年（一一四八）

十月十七日任大外記。↓久寿二年五月四日条の注（2）（七

一頁)。

(41) 雅国 権中納言正二位源国信の息。↓久寿二年五月二

十日条の注(8)(八二頁)。職事は実務を担当する役。

(42) 高陽院 藤原泰子。頼長の異母姉で鳥羽の後。頼長に

は好意的であつた。↓久寿二年四月三日条の注(6)(五頁)。

(43) 成隆 左京大夫藤原家隆の息。頼長の家司。「保元物語

平治物語人物一覽」に立項。

(44) 太后 忠通の娘で崇徳院の中宮聖子。

(45) 範家 参議従三位平実親の息。非参議従三位に至る。

大治五年(一一三〇)十一月二十九日任蔵人、久安四年

(一一四八)十月十三日任右少弁。

(46) 為通 藤原伊通の息。参議正四位下に至る。久安五年

(一一四九)七月二十八日任蔵人頭。『古事談』(巻第二)

は、為通の自讃が原因で廷臣達がふざけあい、頼長の輩  
蹙をかった話を載せる。

(47) 小朝拝 元旦に諸臣達が天皇に拝賀する略式の儀式。

(48) 笏紙を押し 備忘のためのメモを記した紙を笏に貼り

僉議に臨んだ。

(49) 左仗 左近衛府の陣座。

(50) 兀子 腰掛けの一種。

(51) 公教 藤原実行の息。内大臣正二位に至る。久安五年

(一一四九)七月二十八日任中納言。

(52) 道方 左大臣正二位源重信の息。権中納言正二位に至

る。寛仁四年(一一二〇)十一月二十九日長久四年(一

〇四三)正月二十四日の間、権中納言在任。『台記』の記

事件がいつのことか未詳。

(53) 前二条関白 藤原教通。太政大臣従一位道長の息で、

頼通の同母弟。その日記『二東記』は現在ハ散佚。大島

幸雄「藤原教通と二東記」(「史聚」11号)参照。頼長が、

『二東記』を重視し部類記を作らせて利用したことはよ

く知られている。

(54) 廬 直廬。皇族や上級貴族に与えられる宮中における

控え室。

(55) 次将 次将は近衛府の中将・少将。兼長は久安四年(一

一四八)十月十三日任右中将。右大将実能は直属の上司。

(56) 元三 ぐわんざん 元日。

(57) 御殿舎人・居飼 みまのとなり 共に、牛馬の世話や雑用をする役人。

(58) 左金吾 さきんご 左衛門督の唐名。この時、公教は中納言兼左

衛門督。保延七年(一一四二)正月二十九日任左衛門督。

(59) 清職 甲斐守正四位下源雅職の息。大治四年(一一二

九)九月二十一日六位藏人より叙爵(『藏人補任』、また

大膳大夫にも任じた(『重憲記』)。

(60) 先例に依るなり 永治二年(一一四二)正月七日の、

白馬節会 あをうまのせちあひの折も、頼長は内弁を左大将源雅定に譲り、

笏を交換して中座している。交換した笏については、「(雅

定の伝言に言わく―原水補足)又、御笏(紙を加ふ)年

始の預物なり。尤も悦びと為す。仍りて返し奉らず、て

へり。余又彼の人の笏を返さず(彼の人に示さず)。今大

将示す所尤も古礼に叶ふ。古実を知ると謂ふべし。重代

公事の家之有り。」(『台記』該日条)と記す。

(61) 別記 該当する別記は現存しないようだ。

(62) 四方拝 しほうはい 元旦に天皇が天地・四方・山陵を拝する儀式。

幼主の時は行われない。

(63) 笙 しやう 笛の一種。頼長は詩歌・芸能には関心がなかった

が、笙だけは嗜み、源雅定や豊原時秋に学んだ(保延二

年十二月二十日、同五年六月十九日、二十日条、『宇槐記

抄』仁平二年正月二十八日条)。「今日、余、出行せず、

書を見ず、笙を吹かず(余に於いては希有の事為り。依

りて之を記す)。(天養元年十二月二十二日条)と見え、

また、天王寺における管弦の際、失錯の多かったことに

ついて「終身の遺恨何事か之に如かん。」(久安三年九月

十四日条)と記す。

(64) 幽堅 はがため 正月に長寿を願い定められた食品を食べる儀式。

(65) 愛敬鮎 不明。或いは「鰻鰯 あいぎやう」(子持ち鮎を塩漬け

にしたもの)か。「煮塩鮎 カキンヲ」(『江家次第』巻第一 供御薬)

を指すか。

(66) 心喪服 しんさうふく 心喪は、正式な服喪ではないが、心中で喪

に服すること。その服装については、『西宮記』(巻十七 袍)に「○心喪装束 綾の冠、綾の袍、青朽葉、青鈍袴等也(或いは無文の冠を用ゐる)。重服を除くの後一月輕服を着す。」と見える。

(67) 家司 皇族や上級貴族の邸で家政を司るために私的に任じられる役職。

(68) 魚を羞むるは家司の失なり 心喪中であるため、魚鳥類を避けたか。

(69) 申文 上申書。

二日 庚辰 暗に及びて衣を着し、高陽院・土御門前齋院(1) (今、世尊寺(2) 辺に在り)に参る。

別記(3) 元三心喪服の事

# 【注】

(1) 土御門前齋院 「白河院第九皇女也。母令子に同じ。

康和元年卜定。土御門齋院と号す。」(『賀茂齋院記』。

禎子また禎子とも記される。康和元年(一〇九九)ゝ嘉承二年(一一〇七)の間齋院を勤めた。齋院は、賀茂神社に奉仕する皇族。未婚の内親王もしくは女王から選ばれた。

(2) 世尊寺 貞純親王の別業桃園殿を始原とし、藤原行成により寺院化された。一条北大宮西にあった。高橋康夫

「桃園・世尊寺」(『平安京の邸第』望稜舎 昭和六十二年)に詳しい。

(3) 別記 該当する別記は現存しないようだ。

三日 辛巳 他行せず。範家をして成隆所望の事(1)を奏せしむ(件の事密かに書を奉り、法皇及び大相公に申す)。今麻呂高陽院に参る。

# 【注】

(1) 成隆所望の事 七日条に記される成隆加階の申請。

四日 壬午 晴れたり。辰の刻に参内す。御元服(1)に依るなり。巳の一刻に太政殿下参内す。唐車(2)〔法皇の車を賜はる〕。上達部之に従ふ〔伊通・宗能(3)・重通(4)・季成(5)・忠雅(6)・忠基・経定(7)・経宗(8)・資信(9)〕。殿上人前駆す。射場(10)に進みて慶を奏す〔重喪(11)の間は任官叙位の人慶を奏せず。而れども今奏せらる。傾奇すべきものなり〕。了りて朝餉(12)に参る。御元服の後、東北門前に於いて車に乗りて〔余、簾を褰ぐ。殿下之を辞し、頭為通朝臣をして褰げしめ之に乗る〕、院〔白川押小路末離宮〕に参る。余、之に従ふ〔始めに相ひ従ふ卿相猶在り〕。東中門に於いて美作守家長(13)朝臣をして候する由を奏せしむ。此の間、余以下地に跪く。家長聞こし食す状を告げて後拝舞し了んぬ。家長召しを告ぐ。即ち参上し透渡殿(14)に待す〔円座の上簾中に候す〕。須臾にして馬を賜ふ〔藏人の五位(15)二人之を牽き、二人燭を乗る〕。太相公、中門の廊の内方より降り〔沓を着さず〕。笏を搯み〔頭為通朝臣之を搯む〕。右の綱(16)を取りて一拝して

退去するの間、余〔沓を着す〕。笏を搯み同綱を取り〔太相公笏を抜く〕。前駆為基(17)朝臣に賜ふ〔余笏を抜く。此の間太相謝して曰はく軽々と謂ふべし、と〕。次いで、太相公、女院の殿上に詣で〔之より先に、殿下伊通卿に示して曰はく、女院に至りては古へ慶を奏せず。唯殿上に詣づるは如何、と。卿之を諾す〕、顕遠をして参入の由を啓せしめ、召しに依りて簾中に参入す。しばらくありて退出す。諸卿此より帰家すべきの命有り。仍りて余、統子内親王(18)家に詣で、女房に謁ひて退出す。

別記(19) 入内の日時的事 同装束始めの事 平等院の調度を取り出す事 御元服の事 吉服の事

【注】

- (1) 御元服 近衛天皇の元服。これについては別記同日条に詳しい。
- (2) 唐車 皇族・摂関などが晴れに乗る牛車。
- (3) 宗能 右大臣従一位藤原宗忠の息。内大臣正二位に至

る。この時、権大納言正二位。

- (4) 重通 藤原宗通の息。大納言正二位に至る。この時、中納言正二位。

- (5) 季成 権大納言正二位藤原公実の息。権大納言正二位に至る。この時、権中納言正三位。

- (6) 忠雅 権中納言従三位藤原忠宗の息。太政大臣従一位に至る。この時、権中納言正三位。

- (7) 経定 大納言正二位藤原経実の息。権中納言正三位に至る。この時、参議正三位。

- (8) 経宗 藤原経実の息で経定の弟。左大臣従一位に至る。この時、参議正四位下。

- (9) 資信 参議従三位藤原顕実の息。中納言正三位に至る。この時、参議正四位下。

- (10) 射場<sup>ゆば</sup> 内裏内の競射を行う場所。

- (11) 重喪<sup>ぢゆうも</sup> 父母の喪。

- (12) 朝餉<sup>あさがれひ</sup> 朝餉の間。清涼殿内の天皇が食事をする部屋。

- (13) 家長 参議従三位藤原家保の息。久安四年正月二十八

日任美作守(『本朝世紀』)。「保元物語平治物語人物一覧」に立項。

- (14) 透波殿<sup>すゐはの</sup> 寝殿と対屋などをつなぐ廊下。

- (15) 藏人の五位<sup>くらうど</sup> 六位藏人が五位に昇進すること地下になつた者。五位藏人と使い分けられた。

- (16) 綱馬の手綱。

- (17) 為基 高階氏。大治三年(一一二八)正月九日任藏人、同四年八月二十八日兼左兵衛少尉、同五年六月二十二日

任右衛門尉、同年十月五日任檢非違使、保延三年(一一三七)四月三日任中宮権大進(以上『中右記』、康治二

年(一一四三)正月三日叙従四位下(『本朝世紀』、久安二年(一一四六)正月七日叙従四位上(『台記』『本朝世

紀』)。忠通の家司・別当を勤め(『兵範記』久安五年十月二十五日、仁平二年三月十六日条)、その息男基房の政所

別当にもなっている(『兵範記』保元元年八月二十九日条)。

- (18) 統子内親王 鳥羽の第二女。本名恂子。長承三年(一

一三四) 六月、統子と改名。大治二年(一一二七) 天承二年(一一三二) の間齋院。保元三年(一一五八) 二月三日、後白河准母の儀で皇后となり、同四年二月十三日上西門院の院号を受ける。

(19) 別記 「別記」 同日条に、各条項についての記述が存在する。入内は養女多子の近衛天皇への入内であり、その日時を十日酉刻と定め、吉服の事については「心喪を着して(多子入内の―原水補足) 日時を見るは憚り無きに非ず。仍りて吉服を着して参内の次いでに之を見るなり。」とある。また、近衛の元服については、『冠記』の名で詳述されている。ただし、平等院の調度に関する記事は見あたらない。

五日 みづのとひつじ 癸未 別記(1) 御元服後宴の事 きつぷく 吉服の事

【注】

(1) 別記 当該別記は現存しないようだ。

六日 きのえさる 甲申 橘氏大夫(1) 六人に会ひ、まさに爵運(2) に当たるべき者を挙す(成佐、命を伝ふ)。即ち行則(3) を挙し、敦任(4) をして名簿みやうぶを書かしめ、加名して大外記師業朝臣に付く(成佐、之を伝ふ)。今夕叙位じよゐ、仍りて此の事有り(初度の外吉日を扱はず)。例を追ひて唯長者此を挙す。而れども、余、衆心に忤しかふを恐れ、毎年氏人に会ふのみ。是の夜雨雹雷電す。

【注】

(1) 大夫 たいふ 五位の通称。

(2) 爵運 叙爵(従五位下になる) すべき順。橘氏から叙爵すべき者を推挙する事は、久安四年正月三日条にも見える。この時は橘氏の大夫七人に会い、彼等の申請に従い周愷の推挙を決定している。

(3) 行則 系譜未詳。内舍人(『中右記』保安元年十一月二十五日条) と見える人物だろうか。



(4) 敦任 藤原令明の息。↓久寿二年四月五日条の注(15)

(一二三頁)。

七日 乙酉 晴れたり。大風時々飛雪、衣を湿すに及ばず。

午の刻に藏人藤国綱(1)をして御書を三位(2)に

賜はしむ。同刻に参内す。宴会後、太后三条(3)(上皇宮)

に行啓す。余、扈從す(乗車)。御車を寄せん為なり。移り

御して後、院(鳥羽)に参り、重成(4)をして成隆の事(少納言

成隆、余の挙に依りて夜前四位に叙す。官を避けず(5)。件

の状、範家書を送りて之を告ぐ。四位少納言は、大入道殿(6)

及び能信(7)・能季(8)等の卿此の恩有り。他に其の例無

し。畏り申す由を奏せしめて帰家す。

別記(9) 御書の事 賀表の事 恩詔の事 節会の事

吉服の事。

# 【注】

(1) 藤国綱 刑部大輔従四位下藤原元範の息。「藏人国綱(六

位)」「別記」久安四年十月二十日条、「『尊卑分脈』に「刑

部大輔 勘解由判官」と見える。

(2) 三位 藤原多子。公能の娘で頼長の養女となる。久安

四年八月九日叙従三位。

(3) 三条 三条西洞院の御所。『平安京提要』(角川書店

平成六年)に説明が載る。

(4) 重成 系譜未詳。鳥羽の「近臣」と記され、鳥羽と頼

長との取り次ぎをしている。民部大夫藤原重成に同定で

きる可否かは不明。

(5) 官を避けず 少納言は従五位相当官であり、四位少納

言は官位相当ではない。『二中歴』(第二)は、四位少納

言の例として「藤能信 能季 藤成隆 源(藤イ) 信康

重綱」を掲げる。

(6) 大入道殿 右大臣正二位藤原師輔の息の兼家。太政大

臣従一位に至る。天曆十年(九五六)九月十一日任少納

言、応和二年(九六二)正月七日叙従四位下。

(7) 能信 藤原道長の息。権大納言正二位に至る。寛弘八

年（二〇一一）二月一日任少納言、同年十月十九日叙從四位下。

（8）能季 右大臣從一位藤原賴宗の息。權中納言正二位に至る。天喜二年（一〇五四）二月二十二日任少納言、同四年（一〇五六）正月七日叙從四位下。

（9）別記 「別記」該當記述が存在する。近衛より宸筆の書状を拝受した後參内し、節会に臨んだことなどが記されている。

八日 丙戌 終日雪灑ぐ。窮屈に堪へず朝參（1）能はず。障り有るに依りて八省（2）に參らざるの由を外記に触る。

別記 牛を法務寬信（3）に賜ふ事。

【注】

- （1）朝參 朝廷への出仕。
- （2）八省 八省院。太政官八省の政務を行う所。

（3）寬信 參議正三位藤原為房の息。久安三年（一一四七）

正月十四日任東大寺別當、仁平二年（一一五二）正月十四日任法印。「顯密兩道之宿徳也」『本朝世紀』仁平三年三月七日条）、「東寺長者ノ中ニハ寬助・寬信ナド云人コソキコヘケレ」『愚管抄』卷第七）と見える。当該件については「別記」同日条に「今日修法。後夜・初夜に加持僧參上す。余、不動法の時に会ふ。」とある。同記六日条に、多子の入内を妨害される夢を見たため、無事に挙行されるための祈請をしたことが見え、八日の修法もこれに係わると思われる。但し寬信に牛を賜った由の記事はない。

十日 戊子 平明（1）に參内し未の刻に退出す。  
別記 入内の事（2）。

【注】

- （1）平明 あげがた。
- （2）入内の事 賴長念願の養女多子の入内がこの日舉行さ

れた。ただし、この件に関する別記は現存しないようだ。

(補説)

この日は、頼長が政権獲得に向けて具体的な第一歩を踏み出した日と言える。頼長は嫡室幸子の姪である多子を幼少時より養女とし(『台記』永治二年三月二十二日条初出)、近衛への入内を計画しており、久安四年閏六月一日に鳥羽の内諾を取り付け、七月三日に入内準備に着手する。が、その実現になおも疑念を懐き、所願成就のための祈祷を行ったり、鳥羽の意向を再確認するなどしている。予定より遅れはしたが、久安六年のこの日近衛の元服に伴い多子の入内が実現した。ただ、兄の摂政(十二月に関白)忠通がこれを傍観するはずもなく、ただちに伊通の娘の呈子を養女にして入内させるという対抗処置に出る。呈子については、久安四年七月六日に美福門院得子が彼女を養女としている。世には雅仁親王(後白河)に嫁がせる準備と思わせたが、事実上は、得子と忠通・伊通が提携して打った多子入内に対抗する布石だった。この

後、多子・呈子の立后争いの形で頼長と忠通の対立は表面化し、九月二十六日の忠実による忠通義絶に伴う頼長の氏長者獲得、翌七年正月十日の頼長への内覧宣下に至り両者の決裂は決定的となる。が、そこには、忠実・頼長と忠通の両方に良い顔を見せ対立を煽ることで、摂関家の弱体化をもくろむ鳥羽の策謀が絡んでもいた。

十一日 己丑 束帯そくたいの次いでに着陣す(上)日じやうにちに入れん

為(1)。即ち起座す。外記・史等候せず。仍りて着陣の由を大外記家に触る。

別記(2) 後朝きぬぎぬの使の事 息所(多く)の方饗の事。

【注】

(1) 上日じやうにちに入れん為 出勤日数に入れるため。

(2) 別記 現存しないようだ。

十二日 庚寅かのえとら 束帯そくたいの次いでに着陣す。是の夜女をんな叙位じよゐ

(1) 今日今麻呂御前(近衛)に参りて勅に依りて以呂波(いろは)を書く。  
別記 (2) 息所(多子)の方饗の事 餅を催す事

【注】

(1) 女叙位(をんなはじょうゐ) 女子に位を賜ること。

(2) 別記 現存しないようだ。

十三日 辛卯(かのとう) 十日以後風雨の難無し。今日雨降る。天氣

情有(ひつじ)り (1) 未の刻に院(鳥羽)に参り千日講 (2) の座に着す。しばらくありて帰る。今日より心喪服(しんさうふく)を用ゐる (3)。

【注】

(1) 天氣情有(ひつじ)り 十日から十二日にかけての多子の入内行事に好天が続いたことへの感謝。

(2) 千日講 法華經の誦經・講説を千日間行うこと。

(3) 今日より心喪服(しんさうふく)を用ゐる 「別記」四日条に「余、重服を除くと雖も未だ純吉に復さず心喪を着す。(多子入

内の―原水補足) 日時を見るに憚り無きに非ず。仍りて吉服を着す。参内の次いでに之を見るなり。件の日時、元日に勘へしむべきの儀有り。而れども、泰親伐日(たつにち)憚り有るの由を申す。仍りて今日に及ぶ。」とある。ここに言う「重服」は、忠実の嫡室で高陽院(かうやうゐん)泰子や忠通の母である師子が、久安四年十二月十四日に死去したことに依る服喪と考えられる。頼長は実子ではないが、彼女を母と見なしていた(久安二年五月二十九日条)。

十四日 壬辰(みづのえたつ) 去夜雨雪。早朝廷白し。今年余寒耐へ難

し。風痾(ふうあ) (1) 頻りに侵す。而れども息所(多子)参上の間退私能は

ず。身禁中に侍し王事を欠怠するは不忠と謂ふべし。是を以

て、風痾(ふうあ)を相ひ扶けて(なまじひ) 愁(はつしやう)に八省に参る。去夜御齋会(ごさいゑ)の

宣命(せんみやう) (2) 前一日内記内侍に付けて之を奏す (3)。已に

奏し了るや否や。大外記長光 (4) 朝臣答へて曰はく、此の

事を存ぜず、と。此に驚きて奏すべきを仰す。答ふる所云ふに足らず。申の刻に心喪朝服(しんさうてうふく)を服して御前(近衛)に参る。時に

今麻呂いまろ同じく侍す。勅有りて弓きうせん箭せんを帶きす（件くだんの弓きう箭せんは本より御所に在り）。即ち八はつ省しやうに参り、待賢門たいけんもんより入りて東廊の東座に着す（右兵衛督公能卿門下に遇ひ、相ひ伴ひて参入し同じく着座す）。之より先に新中納言忠基卿・右大弁資信朝臣（参議）座に在り。余、外記を召して、諸司具そなはるや否やを問ふ。参り具そなはる由を申す。行事右少弁範家を召して、僧の参るや否やを問ふ。十五口参入の由を申す。鐘を打たしむべきの由（5）を仰す。此の間大外記師業朝臣参り来たり、申して曰はく、堂童子だうどうじ（6）は五位一人候す（内蔵助定輔（7））。此の外の大たい夫ふ、院・宮に候するに依りて悉く雑役を免ず、と。仍りて初日亦一人。而して範家朝臣申して曰はく、長承の比六位奉仕（8）の由所見有り。てへれば、今日六位をして之を勤めしむるは如何、と。仰せて曰はく、六位の堂童子だうどうじ未だ證拠有らず（9）。初日一人今日亦同じ。何の難有らんか、と。弁・少納言・外記・史各一人出居の後、堂上の座に着す（此の間、召使（10）をして余の前ぜん驅く憲親（11）を以て堂童子だうどうじと為すべきの由を大外記に仰せしむ）。此の間

権中納言忠雅卿参入して着座す。両師（12）高座に登りて後、左右舞各二曲を奏す（左四人の中二人青装束を着す（13）。仍りて召使をして追ひ入れしむ。二人立ち舞ふ）。時に乗へい燭しよく（14）。夜に入ると雖も功德に依りて停めざる由寛弘四年小野記（15）に見ゆ。仍りて二曲を遂げ奏せしむ。講説の終頭に雑人ざふにん五穀を奪ひ取る（地布は風吹くに依りて撤せず）。召使をして之を追はしむ。先例に雑人ざふにんを禁すべきの由（16）を弁をして檢非違使けびゐしに伝へ仰す。而れども檢非違使未だ参ぜず。仍りて之を仰すを得ず。公事の陵夷りやうゐ（17）之を為すべからず。行香（左方公卿五人・弁一人・少納言一人、左方堂童子だうどうじ憲親、右方五位・六位・外記・史、式部権少輔成佐、右方堂童子だうどうじ定輔）後、帰座して帶劔たいてん（他卿起座し、僕ぼく従をして之を帶かしむ。無礼と謂ふべし）。衆僧退下して（後戸より出づ。是非を知らず）後に東廊に帰着す（余及び右大弁東座に着す。此の間宰さい相中將教長卿参入し幔外まんがいに佇立ちりつす。余、其の故を問ふ。右兵衛督（公能）曰はく、着の処分を待つか、と。余、着すべきの由を示す。即ち進みて着座す。公卿堂上に在るの間、饌せん（18）

を座前に儲く。一献少納言成隆朝臣（四位少納言）、献盃（19）（先に座の後北方に居す。余、南方に居すを命ず。申文の時南向すべき（20）に依るなり）。史季直（21）（今年叙爵の者）瓶（22）を取る（瓶を取る者二人東西の座に進む。今唯一人。礼を失す。其の由を仰すと雖も出来せず）。巡行後、余の命に依りて右大弁起座す。しばらくありて本座に還着し、申文を示して気色す（23）。余揖する（24）許り。大弁微音に称唯（25）して左顧す。右大史惟宗信弘（26）申文を杖（27）に挿み、南幔より入り壇上（南第二間）に俟す。余、左顧し之に揖す。史、進みて軾（28）に就く。此の間、余、南向して笏を置き（右）、文を取りて之を持つ。史、揖して後文を置く。披見常の如し。了りて表紙を巻き、座端の席上に置く（文首西に在り）。史、之を取りて、先に治部省の解（29）を結ね（30）申す（其の詞、治部省の申せる諸宗の学士等の夾、名申し上ぐと申せる事）。余、揖する許り。次いで僧名を結ね申す（其の詞、僧綱（31）の申せる御齋会の法師等の夾、名申し上ぐと申せる事）。余、申し給へと仰

す。次いで加供（32）の文を結ね申す（其の詞、家々の申せる加供の文申し上ぐと申せる事）。余、申し給へと仰す。史、毎度高く唯し、文を巻きて杖を加へて退出す。余、西向す。余、先年此の事を行ふ時北向す。又、平座見参（33）及び御読経卷数皆座上に向かひて之を見る。是、土御門右府（34）の御説を用ゐるなり。而れども、北山抄（35）・小野年々記を見るに、座下に向かふべきの由（36）見る所なり（北山抄・小野記年来見る所なり。而れども先祖に非ざるに依りて此の説を用ゐず。唯土御門説に據る）。しかのみならず一条左大臣（雅信）（37）南向の由、寛仁三年小野記に見ゆ（38）。先年、禅閣語りて曰はく、九条殿（39）委曲の説已に絶ゆ。御堂（40）、一条左大臣の賀たり。彼の大臣の訓を受く。其の説今に絶えず。てへれば、御堂の末流、豈に彼の相府の説に背くべけんや。是を以て改めて今日南面の儀を用ゐる（未だ参らざるの先に書を内府に送りて曰はく、年来土御門殿の説に拠りて北面の儀を用ゐる。而れども、一条殿南面の由或る記に見ゆ。仍りて彼の儀を改め用ゐんと欲す、てへり。八省

より入内の間、報状到来して曰はく、八はつしやう省東廊申まうしふみ文の時、座上に向かふの由仰せらるる如し。土御門殿記に見ゆ。仍りて其の旨を存ずる所なり。但し、一条殿座下に向かはしめ給ふ。更に異議有るべからざるか。此の如き事仰せ下さるるは尤も名聞たり、と。二献右少弁範家献けんばい盃、流巡し了んぬ。右大弁（實信）に示し、王大夫わうたいふ（41）正親正頼広王おほきみのかみあさひろわう（42）を召す。南幔より入り着座す（北面）。次いで膳を王大夫わうたいふに着く（机を用ゐる）。此の間右大弁（實信）申して云はく、大臣の手長てなが（43）は何人奉仕すべきか、と。仰せて曰はく、五位外記・史（赤衣）奉仕已に定例たり。今何ぞ問ふに及ぶ（長和元・長徳四小野記に見ゆ（44）と。次いで粉熟ふすく（45）を羞む（大外記師業朝臣余の手長てながと為る。史は役送やくそう（46）（今案するに外記役仕すべし）、納言・参議の手長てながは外記、役送やくそうは史）。箸下して後飯汁を居す（余の手長てなが、飯は師業朝臣、汁は左大史師経宿禰（俱に師経飯汁を奉仕すべし。異人然るべからず）、納言・参議の手長てなが・役送やくそうは同上）。箸下して後三献、成隆朝臣献盃（余、一人再献の例を問ふ。答へて曰はく、佗人無きに依り

て再献先例有るの由範家申す所なり、と。仍りて彼の命に従ふのみ）、流巡し王大夫わうたいふに及ぶ。次いで召使をして宣せんみやう命を催さしむ。内記杖ぢやうに挿さしはさみ之を奉る。南向して之を取り見了んぬ。内記退きて後、笏しやくを正し王を目して進み宣せんみやう命を給ふ。北幔より出でて後、弁（範家）を召し、布施堂ふせだう（47）の事具ふや否やを問ふ。具ふ由を申す。次いで昭訓門せうくんもんより入り、廊内を経て大極殿の東北壇上の北に及び、廊を登りて布施堂ふせだうに着す（座後より之に着す。此の間教長卿御堂ぐぶに供奉すべきの由に触れて退出す。衆僧あらかし予め着座）。劔を解きて（或いは曰はく、劔を解きて着座するは理然るべからず。仍りて着して後之を解く）笏しやくを置き、俱に三拝し了りて笏しやくを把る。次いで、王大夫わうたいふ着座して宣制せんせい（48）し退下す。次いで、大藏権少輔致遠しやう（49）、布施目錄を三僧に授く（文・杖さしはさに挿む）。次いで同史生しじやう（50）三僧の持つ辛櫃からびつを昇かきて其の前に置く。次いで同史生衆僧の布施ふせを昇かきて各前に置く（從儀師じゆうぎし（51）其の所に臨む）。次いで堂達だうだつ（52）磬けい（53）を一度打つ（丞手を案に触れて後之を打つべし（54）。今早く

打つは失也)。次いで大藏丞一人仏布施の案下に到りて手を懸く(丞此の由を存ぜず。余、催し仰せて進らしむ。諸卿曰はく、近年此の事無し。故に丞及び諸人之を存ぜず、と)。次いで呪願(55)了んぬ。余以下笏を置く。但し一拝す(此の拝先例多く笏を把る。而れども北山抄に遽りて(56)之を置く)。次いで帯剣して笏を把る。

【注】

(1) 風痾 風邪。

(2) 御齋会の宣命 御齋会は正月八日から十四日までの間、宮中において国家の安寧を祈願する行事。宣命は天皇の命を伝える文書の一形式。

(3) 前一日内記内侍に付けて之を奏す 『小野宮年中行事』(正月)に「十四日 大極殿御齋会終る事 前一日内記宣命を以て内侍に付けて之を奏せしむ。覽じ了りて返し給ふ。」と見える。

(4) 長光 藤原敦光の息。↓久寿二年四月二十七日条の注

(11) (四六頁)。

(5) 鐘を打たしむべきの由 『西宮記』(巻一 御齋会)に「鐘を打つ(上 卿弁に仰す)」と見える。

(6) 堂童子 御齋会などの行事で花筥を配りなどする役。

(7) 定輔 橘氏。系譜未詳。「大夫(五位)」内藏権助橘定輔(元散位陪從)「内藏助」「内藏権助」(『台記』『兵範記』『本朝世紀』など)と見え、「前内 藤助」(『山槐記』

仁安二年二月十一日条)と見えるが、官歴等も定かでない。

い。

(8) 長承の比六位奉仕 このこと未確認。

(9) 六位の堂童子未だ證違有らず 『西宮記』(巻一 御齋会)に「堂童子着す(四位二人、五位二人)」と見える。

(10) 召使 史生の下にあり、官人を召したり雑役に従事する役。

(11) 憲親 藤原顕憲の息で、頼長の母方の従兄弟で家人。原水「頼長の死を語る男たち」(『国語と国文学』昭59・八)を参照されたい。



(12) 両師 講師と読師。

(13) 青装束を着す 青装束の舞人が追い入れられた理由に

ついては未勘。「青色 天皇著し御す(略)藏人之を著す。

所の雑色御襖みそぎの前駆みそぎ之を著す。拝領の由歟。藏人禁色きんじき

を聴ゆるさるるの時、先づ御衣等を著す。其の意なり。仍て

件の色古物を相伝す、と云々。」(『飭抄』上 袍はう)とあ

り、『続有職問答』には、「問 青色の袍はういかなる人人着

するや。 答 西宮記に曰はく、青色、帝王及び公卿以

下の侍臣便に随ひて之を服す。」と見える。また『助無智

秘抄』には「青色ヲキザル事」の項に着用してよい場合

を挙げる。青装束を着するには制約があったか。

(14) 乗 燭 ひともしごろ。

(15) 寛弘四年小野記 小野記は藤原実資の日記『小右記』。

小野年々記とも記している。活字本に当該年次はない。

(16) 先例に雑人を禁すべきの由 『中右記』(天永二年正月

十四日条)に「此の間雑衆人走り登りて五穀を取らんと

欲す。濫らんぎやう行極り無し。行事の弁兼ねて使を誠め了んぬ。

制止せしむべきなり。誠に以て不便なり」と見える。

(17) 陵夷 衰えること。

(18) 饌 酒食。

(19) 献盃 酒を注ぐこと。

(20) 申 文の時南向すべき 『中右記』(元永元年正月十

四日条)に「予密二問ふて云はく、南に向かひて申文を

取るは如何、と。返答に云はく、上方を仰ぎて取るの由

日記に見ゆと雖も、故民部卿南向して取るを善しと為す

の由前年教へらるるの由慥に覚え候ふ。」と見える。

(21) 季直 清原氏。系譜未詳。勘解由主典かげゆしゅてんで康治二年(一

一四三)正月二十七日太皇太后たいくわうたいこう宮少属せうさくわんを兼ねる。

久安三年(一一四七)四月一日任右少史、同四年正月二

十八日任左少史、同五年八月二十八日任右大史(以上『本

朝世紀』)。

(22) 瓶 酒を注ぐ容器。

(23) 気色す あらたまった様子をする。

(24) 揖する 会釈をする。

(25) 称唯 上長の言に返答の声を発する。

(26) 惟宗信弘 『官史補任』付載「官史考証」に依れば、

東京大学史料編纂所蔵『惟宗系図』に仲信の息とある

由。久安三年（一一四七）四月一日図書允より任右少

史、同四年正月二十八日任左少史、同五年十月二十二

日任右大史（以上『本朝世紀』、仁平元年（一一五一）

九月二十八日任肥前介（『山槐記』除目部類）。

(27) 文杖 貴人に直接手渡しする失礼を避けるために文

書を挟む杖。

(28) 軾 膝突。ひざまづく時の敷物。

(29) 解 機関や上級者に提出する文書。

(30) 結ね 申文を広げて読みあげ、もとにもどす行為。

(31) 僧綱 位を持つ僧。

(32) 加供 仏事で布施や供物を差し出すこと。

(33) 平座見参 平座は天皇の出御のない略式の宴会。見参

はその出席者の名簿。

(34) 土御門右府 源師房。村上天皇の皇子具平親王の息。

藤原頼通の猶子となり、摂関家と提携した。該年五月十

九日条には、頼長が故師房と談笑する夢を見たことを記

しており、親近感を抱いていたことが知られる。「土御門

右府の御説」（『土御門説』）「土御門殿の説」（『土御門殿記』

などとも記される）は彼の日記『土右記』を指すと考え

られる。現在はごく一部が残存しているに過ぎず、『台記』

の記載を裏付ける事実は見いだせない。

(35) 北山抄 藤原公任の著した儀式書。源高明の著した

『西宮記』と並んで、後代の貴族達の作法の規範書とさ

れた。

(36) 座下に向かふべきの由 『北山抄』（巻第一）に「天延三

年、雅信卿少しく南面す、と云々」と見える。

(37) 一条左大臣（雅信） 源雅信。宇多天皇の皇子敦実親

王の息。娘の倫子は藤原道長の嫡室。

(38) 寛仁三年小野記に見ゆ 『小右記』（寛仁三年正月十四

日条）に「日記を尋ね見るに左大臣雅信少しく南向す、

てへり」と見える。また、長和二年正月十四日条にも「予

頗る南向す」とある。

- (39) 九条殿 藤原師輔。太政大臣従一位忠平の息で道長の祖父。右大臣正二位に至る。

- (40) 御堂 藤原道長。太政大臣従一位兼家の息で太政大臣従一位に至る。

- (41) 王大夫 四位・五位の王。王は、親王にもならず臣籍にもくだらない皇族。

- (42) 正親正顕広王 顕広王は、花山源氏で正親正安芸権守源顕康の息。後に王氏に復した。正親正は正親司

の長官。

- (43) 大臣の手長 手長は宴会における給仕役。陪膳に同じ。

「次いで粉熟(手)〈底本―果至、他本に従う〉長は大夫史師経(略)益送は史(須く外記を用ゐるべし。今

日人数無〈底本―女、内二に従う〉きに依りて史を用ゐる)」「『台記』仁平四年正月十四日条)、「次いで粉熟を居す。大外記は内府の手長為り。六位外記は納言以下の手長為り。史は益送為り。」(『兵範記』保元三年正月十四日

条) などと見える。

- (44) 長和元・長徳四小野記に見ゆ 長徳四年に関しては、『小右記』(治安四年正月十五日条)に「長徳四年正月十五日

記に云ふ。史奉親宿禰云はく、(略) 右大臣の手長、外記重忠奉仕す、と。大臣云はく、大外記善言朝臣を以て奉仕せしめよ、てへり。件くだんの事前例無し、てへり。然れども上しやうけい卿の命に依りて慙に以て奉仕す、てへり。」と見えるが、長和元年記については確認できない。

- (45) 粉熟 穀物の粉に甘みを付け茹でて固めた食品。

- (46) 役送 宴会で食膳を運ぶ役。

- (47) 布施堂 『北山抄』(巻第一)に「公卿布施堂に着す(昌

福堂、雨儀小安殿)」とあり、『権記』(長徳四年正月十四日条)にも「内大臣以下布施堂に就く(年来晴儀行はず。

小安殿に於いて此の事有り)」と見える。この日も、「雨雪」のため小安殿が利用された。ただ、雨でなくても小安殿を使用することもあったようだ。

- (48) 宣制 宣命を読み上げること。

(49) 致遠 伊岐氏。系譜未詳。大治四年(一一二九)正月二十四日任出羽守(『中右記』)。同書には他に「史」(天仁元年二月十七日条)、「史大夫」(元永二年三月二十日条)などに見える。

(50) 史生 公文書を写したり整える仕事をする下級官人。

(51) 従儀師 法会において威儀師を補助する役。

(52) 堂達 法会において願文等を導師等に捧げる役。

(53) 磬 金属(古くは玉・石)の板で作った仏具の一種で、法会の時打ち鳴らす。

(54) 丞手を案に触れて後之を打つべし 『北山抄』(巻第一)に「次いで丞一人仏布施案下に到りて、手を案脚に扶す。

次いで堂達磬を一度打つ」、また『西宮記』(巻一)に「堂達磬を打つ(天慶四年記に云ふ。省丞此の間机下に就きて手を懸く。)」と見える。案は机のこと。

(55) 呪願 法会の時、導師が願意を述べその成就を祈ること。

(56) 北山抄に據りて 『北山抄』(巻第一)に「公卿以下

又笏を置きて一拝す(承平七年、安和三年、笏を把る、と云々。近例又之を把る。然れども旧例を檢するに、笏を置くの由、承平五八年私記に見ゆ。又彼の御記失ふ由を注せらる、と云々)」と見える。『中右記』(天永二年正月十四日条)には「公卿以下一拝す(笏を持つ。但し、北山抄に云ふ。笏を置く、てへり。而れども近代笏を持ちて拝すか。)」とある。また、『西宮記』(巻一)には「公卿以下(召使以上)共に一拝す(笏を把る。先に五位已上拝す。次いで六位以下拝す。)」とある。

(十四日の続き)

衆僧北戸を出づる後起座す(右兵衛督曰はく、近例は僧の出づるを待たず起座す(1)、と。余、曰はく件の事礼に非ず。今日礼を復すべき也、と)。本道より昭訓門を出で(召使松(2)を取りて前行し待賢門に到る。夜に入るに依りて御前(3)無し)、待賢門外に於いて乗車し(忠基卿此より円宗寺(4)に参る)、参内す(東三条(5))。二条油小路に到り

て車を降り西門より入りて右近陣座に着す。陣官に仰せて<sup>しよく</sup>軾を敷く。少納言成隆朝臣着座す（弁、八<sup>はつしやう</sup>省より円宗寺に参る）。次将良久しく見え来たらず。陣官をして召し求めしむ。頭中将公通朝臣・少将公保（6）参り来たり。公通朝臣着座す。公保未だ着陣せざる（7）の由を申す。仰せて曰く、着座せずと雖も猶<sup>すべから</sup>須く献<sup>けんばい</sup>盃すべし、と。故に<sup>あらかじ</sup>予め肴物を居す（須<sup>すべから</sup>く着座の後之を居すべきか。但し長久四年<sup>あらかじ</sup>予め居す。土御門記に見ゆ（8）。一献公通朝臣余に酌す（継）。座下より盃を取り流巡す。<sup>（資信）（成隆）</sup>右大弁少納言に転ず。次いで陣官に仰せて外記・史を召す。大外記師業朝臣・左大史師経宿禰<sup>すくね</sup>及び六位外記・史着座す（西落板敷<sup>おちいたじき</sup>（9）。此の間衆僧推参す。陣官をして之を禦<sup>ふせ</sup>がしむ。二献公保（両献将<sup>しやうげん</sup>、監（10）瓶<sup>へい</sup>を取る）、<sup>（資信）（公通）</sup>右大弁頭中将に転ず。頭中将少納言に転ず。陣官酒を外記・史に行ふ（此の事前例を知らず。仍りて諸卿に問ふ。答へて曰く、近例此の如し、と。今案ずるに理尤も然るべし）。此の間<sup>（資信）</sup>右大弁に示し外記を召す。外記（六位）起座し進みて北庭に候す。余、右顧して之に目す。外記称<sup>みしやう</sup>唯<sup>しよく</sup>軾<sup>つ</sup>に就く。

僧を入れしむることを仰す。外記西門を出でて仰せを伝ふ。僧等参入す。南庭に度り東中門辺を徘徊す。<sup>（公通・公保）</sup>次将二人三献能はず。即ち湯漬<sup>ゆづけ</sup>を羞<sup>すす</sup>む（余已下将<sup>しやうげんてなが</sup>、監手長）。箸を下す。次いで羹<sup>いもがゆ</sup>菰粥<sup>もぢゆ</sup>を羞<sup>すす</sup>む（居し了るを待たず之を食す。甘美に付き一枝残さず）。藏人源清季（11）来たりて召す（須<sup>すべから</sup>く御装束了んぬと称ふべし（12）。召すと称ふるは失なり）。余已下<sup>しやく</sup>笏<sup>しやく</sup>を正し之に揖<sup>いふ</sup>し、南庭を経て殿上に着す。出居<sup>いであ</sup>の将（13）着し了りて参上す。法務寛信遅参す。時刻推移し子の刻に及びて参入す。僧侶着座す。法<sup>ほつ</sup>橋慈源（14）御前に進みて僧名を讀む（余、加持香水<sup>かちかうすい</sup>（15）後読むべきの由を仰す。寛信曰はく、前後両説有り、と。余、怒<sup>なまじひ</sup>に之を許す）。座に復して後、寛信加持香水<sup>かちかうすい</sup>し座に復し了んぬ。権少僧都尋範（16）番<sup>つがひ</sup>論議（17）の僧を召す。奉仕せしむること常の如し。最後の番<sup>つがひ</sup>仲寛（18）。随喜<sup>ずいき</sup>（19）の公卿<sup>しやく</sup>笏<sup>しやく</sup>を置く。仲寛帰座の後<sup>しやく</sup>笏<sup>しやく</sup>を取りて起座す（之より先に両納言退き昇る。候する所唯余と<sup>（資信）</sup>右大弁となり）。殿上の戸の前に到り（年中行事障子<sup>ねんちうぎやうじのさうじ</sup>（20）と戸との間なり）、跪きて（左膝<sup>しやく</sup>）<sup>しやく</sup>笏<sup>しやく</sup>

を拵<sup>さしはさ</sup>みて祿を取る（六位之を授く。余、仰せて五位（俊光（21））をして之を授けしむ。五位藏人候せず）。中門の廊より北向し、寶子<sup>すのこ</sup>（22）より西行し、北面僧綱<sup>そうがう</sup>の座の東より入りて寛信の前に跪きて之を授く。寛信相ひ跪きて之を受けて座に復す。余、笏<sup>しやく</sup>を抜きて起ち右廻し（大内は左廻、是は御前の方の廻なり）、寶子<sup>すのこ</sup>より座に復す。次いで右大弁尋範僧都に授く。次いで出居<sup>いであ</sup>（劔を帶し笏<sup>しやく</sup>を挿<sup>さ</sup>む）及び侍従祿を僧綱・凡僧<sup>ぼんぞう</sup>（23）に授く。了りて僧侶起座す。余、布施呪<sup>しゆぐわん</sup>願有るべきの由を仰す（24）。威儀師<sup>ゐぎし</sup>（25）迷惑す。余、威儀師座前を立ちて布施呪<sup>しゆぐわん</sup>願を称ふを教諭す。僧侶動かず。余、第一の人奉仕の由を示す。即ち寛信立ちて呪<sup>しゆぐわん</sup>願（右大弁曰はく、近代此の儀無し。是を以て諸僧知ること無きの故なり、と）の後座に復す。一々退出す。次いで余以下退出す。次いで出居<sup>いであ</sup>退下す。余、息所<sup>（多子）</sup>の方に向かひて参上す。後に延勝寺（26）に詣づ。之より先に法皇・美福門院此寺に御す。事了りて還御。卿相步行（余、之に同じ）。次いで禁裏<sup>きんり</sup>に帰参す。時に東方既に明く。今日御論義の間、今麻呂<sup>いまろ</sup>、尻長<sup>しりなが</sup>

（27）・指貫<sup>さしぬき</sup>を着して御在所の簾中に待す。翌日（十五日）覺敏<sup>かくみん</sup>（28）得業<sup>とくごふ</sup>をして寛信に問はしめて曰はく、西北二抄・小野年々記、皆加持香水<sup>かちかうすい</sup>の後、論義の僧名を読む（29）（此等の記を送りて見しむ）。夜前両説有るの由を陳ず。疑ふ所無きに非ず。宜しく證文を見すべし、と。報命に曰はく、先師嚴覺<sup>げんかく</sup>（30）両説有るの由を教ふ。後に先父為房（31）卿家に於いて吏部王記<sup>りほうわうき</sup>（32）を勘ふるに実に二説有り、と。即ち勘文<sup>かんもん</sup>一紙を送る。

先に奏を読み後に灑水<sup>しやすい</sup>（33）の説

李部王記第二（部類）に云はく（34）、延長三年正月十四日御齋会了んぬ、と云々。清凉殿<sup>せいりやうでん</sup>の下東廂<sup>ひさし</sup>の御簾<sup>みす</sup>、額間<sup>がくのま</sup>（35）に当たりて香水<sup>かうすい</sup>を置く、と云々。群臣着座の後、僧等入りて着座す。律師進みて僧綱<sup>そうがう</sup>の解文<sup>げぶん</sup>を読む。次いで大僧都觀賢<sup>くわんけん</sup>（36）進みて香水<sup>かうすい</sup>を散す。次いで僧綱問答名を唱へ、論義せしむ。

同六年正月十四日云々。会了りて内論義常<sup>うちろんぎ</sup>の如し、と云々。延敏<sup>ちんみん</sup>（37）律師進み立ちて問答の元子<sup>もとこし</sup>の間の東に立ち、法師

の夾けふみやう名なを読む。観宿(38)僧都ごこ五股(39)を持ちて香水かうすいの北に居して加持かぢす。楊枝を以て之を散す。衆僧の論義及び禄を賜ふは例の如し。

先に灑しやすい水後に奏を読む説

同記同卷延長七年濟高律師一度(40)、承平二年会理律師一度(41)、同七年・天慶二年已上貞崇僧都二度(42)、天曆四年・同五年・天徳五年已上寛空僧正三度(43)、件くだんの四人九度、皆灑しやすい水前奏後(下し給ふ諸記の如し)。

先年、先師嚴覺大僧都禪誉(44)僧都ごこと此の事相論す。嚴覺本より両説有るの由を存ず。禪ぜん誉ご、奏前灑しやすい水後の旨を申す。而れども此の説文両説分明候ふか。

久安六年正月十六日

法務寛信 上たてまつる

余、之を見て承伏す。彼の記を見ずみだり猥みだりに疑問を起こす。頗る以て恥有り。寛(寛信)公唯頭けんみづ密を兼学するに非ず亦已に書記を涉はふ獵ふす。尊たふぶべし。美はむべし。

別記(45) 心喪束帶しんさうそくたいの事

# 【注】

(1) 近例は僧の出づるを待たず起座す 『西宮記』(卷一 御齋会内論義)に「弘仁十一、正月十四日、中納言藤原朝臣宣す。承前、群官或いは衆僧未だ先に起たず、てへり。或いは衆僧起ち畢りて後退く。今より以後宜しく講堂に准じ衆僧起ち了りて後退去すべし。永く恒例為るべし、てへり。」と見える。

(2) 松 たいまつ。

(3) 御前ごぜん みさきばらひ。先導役のこと。

(4) 円宗寺 後三条天皇の御願寺。初名は円明寺。円宗寺・法成寺・尊勝寺・最勝寺・成勝寺・延勝寺・法勝寺では、八日から七箇日間金堂修正会が行われる。

(5) 東三条 近衛天皇は正月四日に举行された元服式のため、前年の十二月二十二日より東三条殿に移り住んでゐる『本朝世紀』。

(6) 公保 藤原実能の息。権大納言正二位に至る。久安五年(一一四九)四月十五日任右近権少将。

(7) 未だ着陣せざる 新任官叙位の人が初めて陣座（政務の座）に列席する儀式にまだ臨んでいない。

(8) 土御門記に見ゆ 確認できない。

(9) 落板敷 おちいたじき 周囲より床を低く張った板の間。

(10) 将監 しやうげん 近衛府の判官。供奉や警護に当たる。

(11) 源清季 系譜未詳。あるいは木工権頭正四位下の季兼の息、下野守正五位下季広（本清季）に同定されるか。

久安三年（一一四七）四月一日任皇太后くわうたいこうぐう宮権少進、同五年九月二十二日任縫殿（権）助、以後、藏人左衛門尉

となり仁平元年九月四日叙爵（以上『本朝世紀』。また、

同年二月八日任檢非違使（『台記』）。

(12) 須すべからく御装束了んぬと称ふべし 『西宮記』（巻一

御斎会内論義）に「天徳四、正月十四日九記に云はく、

（略）藏人永保来たりて告ぐる由、此れ違例、只御前装束了る由を告ぐべし。」とある。また、『中右記』（永長元

年正月十四日条）に「藏人盛家陣を出でて御装束了る由を告ぐ。」と見える。但し、長治元年正月十四日条には「藏

人平実親（青色を着す）軾に着し、仰せて云はく、御装束。此の詞如何、故実か尋ぬべし。」と記す。

(13) 出居いでみの将 出居（寝殿造りの建物に設けた部屋の名）に祇候して執務する近衛少将。

(14) 慈源 少内記従四位上菅原淳中の息（法橋 横川長吏

北野別当）に同定されるか。大治四年（一一二九）正月十五日阿闍梨の宣旨を得る（『中右記』）。

(15) 加持かちかうずい香水 修法で加持した香水を注いで穢れを浄化する儀式。

(16) 尋範 太政大臣従一位藤原師実の息。『興福寺別当次第』

（卷之第二）に詳しい経歴が載る。

(17) 番論議 つがひろんぎ 仏教の要義を問答すること。本来は五番十

題だが、三題であることも多い。内容は固定化し、儀式化した。

(18) 仲寛 上総介従四位下源頭俊の息か。延暦寺僧で法眼。

『兵範記』（保元二年四月二日条）に「得業」と見える。

(19) 随喜ずいき 法会に参加すること。



(20) 年中行事障子 宮中における年中行事を書いた衝立。

(21) 俊光 橘正遠の息。↓久寿二年四月九日条の注(2)(一

六頁)。

(22) 簀子 濡れ縁。

(23) 凡僧 位を持たない僧。

(24) 布施呪 願有るべきの由を仰す 『西宮記』(巻一

御齋会内論義)に「威儀師長橋座前に立ちて布施呪願を請ふ。呪願了りて退下す。」と見える。

(25) 威儀師 僧の職名。法会の時、衆僧の威儀を整える役。

大威儀師・威儀師・從儀師の順位がある。

(26) 延勝寺 近衛天皇の御願寺。久安五年供養。

(27) 尻長 裾を長く仕立てた袍の一種。

(28) 覺敏 『平安時代史事典』は藤原基俊の息実頭(本

覺敏)に同定するが、『尊卑分脈』の「散位 從五下阿波權守」との経歴記載を不審とする。頼長との関係については、しばしば論議をしている他、頼長の養女多子入内の祈請をしたり(『台記』久安七年正月十日条)、頼長の

漢学の師成佐の疾病平癒の祈りの導師となっている(『台記』久安六年十二月十三日条)。

(29) 西北二抄・小野年々記、皆加持香水の後、論議の僧名

を読む 加持香水と論議の僧名を読むことの先後について、『西宮記』(巻一 御齋会内論義)は「真言の僧綱進みて跪き、立ちて加持香水す。(略)僧綱進み立ちて結番を読む(律師之を読む)。頭宗の僧綱番僧等を召し立て、当講已下論議す。、『北山抄』は「阿闍梨加持香水す。僧綱の夾名を読む。次いで論議畢んぬ。」と記し、共に加持香水を先とする。また、『小右記』(小野年々記)にも「權僧正濟信(今夕新任)加持香水す。律師文慶結番を読む。(略)御論義常の如し。」(長和二年正月十四日条)、

「僧正濟信加持香水し本座に復す。權律師尋清進み立ちて御論義の僧名を読む。(略)論義了んぬ。」(寛仁三年正月十四日条)などに見える。

(30) 嚴覺 參議從二位源基平の息で、行尊の弟。大僧都、東寺長者。『僧歴綜覽』に経歴が載る。

(31) 為房 但馬守正四位上藤原隆方の息で寛信の父。参議正三位に至る。博識で儀式書の著作がある。

(32) 吏部王記 りほうわうき 醍醐天皇の皇子重明親王の日記。現存しないが、『史料纂集』に逸文が収録される。日記名は彼が式部卿(吏部尚書)であつたことに由来する。

(33) 灑水 しやすい 香水を注ぎ浄化する儀式。

(34) 李部王記第二(部類) に云はく 『御質抄』に「李部王記第二に云ふ。年中二」として延長三年正月十四日並び

に六年正月十四日の同文が掲載されている。

(35) 額間 がくのま 殿舎の名を書いた額を掲げている部屋。

(36) 親賢 秦氏あるいは伴宿禰とも。仁和寺別当、東寺長者、醍醐寺初代座主、金剛峯寺座主等を歴任。

(37) 延傲 ちん 長統氏。東大寺別当、東寺長者、醍醐寺座主等を歴任。

(38) 親宿 宗岳氏。東大寺別当、金剛峯寺座主、東寺長者等を歴任、大僧都となる。

(39) 五股 ごこ 五鈷のこと。先に五頭に別れている金剛杵。『御

質抄』は「三股」とする。

(40) 濟高律師一度 濟高は勸修寺別当、東大寺別当、金剛峯寺座主等を歴任、大僧都となる。御齋会の内論議については『御質抄』に「延長七年正月十四日法師等参入して論議 常の如し 濟高律師問答の座の間より起ち、香水を机の東に居し香水を三散す。」と見える。

(41) 会理律師一度 会理は、延長六年(九二八)閏八月二十八日任権律師、同七年東寺別当、承平元年(九三一)十月二十七日任律師、同五年十月十二日任権少僧都(『僧歴綜覧』)。承平二年の御齋会の内論議については『御質抄』に「承平二年正月十四日御齋会の事了んぬ。(略)会理律師加持香水す。令展律師法師の交名を説む。」と見える。

(42) 貞崇僧都二度 貞崇は三善氏。東寺長者、醍醐寺座主、金剛峯寺座主、薬師寺別当等を歴任。御齋会の内論議については『御質抄』に「同(承平—原水補足)七年正月十四日御齋会了りて参入す。(略) 律師貞崇進みて香水

を散す。平愿僧名を読む。論議了んぬ。」「天慶二年正月十四日（略）少僧都貞崇香水を散す。律師仁教僧名を読む。論議了んぬ。」と見える。

(43) 寛空僧正三度 寛空は広沢流の祖。東寺長者、金剛峯

寺座主、仁和寺别当等を歴任、僧正となる。御齋会の内論議については『御質抄』に「天曆四年正月十四日（略）

寛空僧都問答の兀子の間に進みて加持香水一灑して座

(マ)等に復す。律師延珍答者の座北に立ちて僧の交名を読む

む、と云々。」「天曆五年正月十四日（略）寛空僧都進み

て加持香水す。延珍律師兀子の北に立ちて僧名を読む。

去年の如く三刻に論議了んぬ、と云々。」「天徳五年正月

十四日（略）権僧正寛空机下に進みて加持香水を散す。訖<sup>フハ</sup>

りて復座す。権律師観理起座して論義を読む。衆僧の交

名常の如し。」と見える。

(44) 禅誉 宮内大輔従五位上藤原重房の息。権少僧都。仁

和寺僧。

(45) 別記 現存しないようだ。

十五日 癸巳<sup>みづのとみ</sup> 未<sup>ひつじ</sup>の刻に四条皇居（1）に参り、息所<sup>（多子）</sup>

の廬<sup>ろ</sup>を見る。右大将・親隆<sup>（実能）</sup>（2）朝臣参会す。しばらくあり

て大炊第<sup>おほひ</sup>（3）に退く（憚り無きの日たるに依りて初めて退

私す）。浴湯の後、烏帽<sup>えぼ</sup>を着して院<sup>（鳥羽）</sup>に参る。時に戌<sup>いぬ</sup>の刻

弥陀講<sup>みだかう</sup>（4）了んぬ。大炊に帰りて後、万寿麻呂<sup>まんじゆまろ</sup>（5）出居<sup>いでゐ</sup>

に於いて元服を加ふ。宇治の仰せに依るなり。此の間、右大将<sup>（実能）</sup>

・宰<sup>さいしやう</sup>相中将教長卿来会す。脂燭<sup>しそく</sup>（6）は六位（憲頼（7）

・有忠（8）、理髪（9）は為実（10）、引入<sup>ひきいれ</sup>（11）（烏帽<sup>えぼ</sup>

を用ゐる）は教長卿、前物陪膳<sup>はいぜん</sup>（12）は以長<sup>もちなが</sup>（13）。此の間、

余、吉服<sup>きふく</sup>を用ゐず。宇治<sup>（忠実）</sup>の仰せに依りて、余の烏帽<sup>えぼ</sup>・本結<sup>もとゆひ</sup>

（14）・指貫<sup>さしぬき</sup>（薄色（15））堅文<sup>かたもん</sup>（16）の織物<sup>（忠実）</sup>・引入<sup>ひきいれ</sup>（17）

を賜ふ。帰家して後、禅間<sup>（忠実）</sup>、仲行<sup>（忠実）</sup>（18）をして劔・馬等を送

らしむ。今夕、今麻呂<sup>いままろ</sup>初めて九禁<sup>きうきん</sup>（19）に宿<sup>とどめ</sup>す。

# 【注】

（1） 四条皇居 藤原清隆が鳥羽院に献上した邸第。久安四

年（一一四八）土御門内裏が焼失したため近衛天皇の仮御所となった。『平安京提要』に説明がある。

(2) 親隆 参議正三位藤原為房の息。参議正三位に至る。

この時、尾張守正四位下。

(3) 大炊第 おほひ 大炊御門高倉邸。もとは頼長の義父実能の邸宅で、東屋には実能・公能父子、西屋には頼長が住み、

久安六年氏の長者になり東三条殿に遷るまでここを居宅としたという。橋本義彦『人物叢書 藤原頼長』。

(4) 弥陀講 みだかう 阿弥陀如来についての経論を講説する儀式。

(5) 万寿麻呂 まんじゆまろ 頼長の侍童。『人物叢書 藤原頼長』に説明がある。

(6) 脂燭 しそく 松の木に油を塗って作った照明具。ここは脂燭を持つ役。

(7) 憲頼 駿河守従五位上藤原説定の息。頼長の勾当。↓久寿二年四月五日条の注（19）（一三頁）。

(8) 有忠 美濃守従五位下源信邦の息。頼長の六位の勾当。↓久寿二年五月二十四日条の注（29）（八八頁）。

(9) 理髪 元服において髪型を整える役。

(10) 為実 信濃守従五位上藤原永実の息。為真とも記される。保安元年（一一二〇）正月十二日任藏人（『中右記』、

保安五年（一一二四）正月二十二日任肥前守（『二中歴』第十 当任歴）。忠実家の職事（『殿暦』康和四年九月十日条）、師長の政所別当（久安五年十月十九日任。『兵範

記』を勤めた。『兵範記』久寿二年（一一五五）八月二十三日条に「為実法師」と見える。鷹狩りを特技とした

（『富家語』）。

(11) 引入 ひきいれ 元服において冠もしくは烏帽子をかぶせる役。

(12) 陪膳 はいぜん 給仕役。

(13) 以長 もちなが 信濃守正五位下橘広房の息。久安三年（一一四七）四月十七日学官院别当（橘氏長者）となる（『台記』。

保元二年（一一五七）十月二十二日叙従五位上（『兵範記』）。頼長の職事であり、その息兼長の雑色所别当にもなった

（『台記』久安四年十一月十日条）。頼長死去後は忠通の職事となる。機転の利く人物であったが（『台記』久安二

年正月十五日条)、頼長を上回る理屈屋でもあった(『宇治拾遺物語』)。

(14) 本結 髻を結ぶ紐。

(15) 薄色 薄紫色。

(16) 堅文 かたもん 固文とも書く。文様を浮き上がるように編む浮文。

に対して、堅く埋める織り方。「晴の時は浮文、常ハ堅文。

但し、近年五位藏人等所存に随ひて之を著す」(『飴抄』

上 表袴)。

(17) 引入 ひきいれ 烏帽子の一種である引入烏帽子。

(18) 仲行 ふけこ 大膳大夫正四位下高階仲範の息。忠実の近習で、

『富家語』の筆録者として知られる。

(19) 九禁 きうきん 宮中。

十六日 甲午 きのえうま 申の刻に高陽院かやのあんに参り、晩に及びて新院(崇徳)

に参る。須臾しゆゆにして参内し(心喪服しんさうふく)、吉服きふくを服して内弁ないべん

(1) を行ふ。御酒勅使みきのちよくし(2) は教長卿せんみやうし、宣命使(3) 之

に同じ。祿所(4) は経宗朝臣。国栖くす(5) 立楽。余、殿を

降りて之を催す。御物忌ものいみに依りて南殿なでん(6) に御さず。事

了り祿所に臨まず。是の夜息所(多子)の廬辺ろへに宿す。今麻呂いまろ猶内に

宿す。西の刻に範家問ふて云はく、女叙位をんなじよゐの夜(7)、大相府(忠通)

参入の後、衣裳・劔・笏しやくを持つ者水門に入るの間追ひ還す

者有り。瀧口所たきぐちどころ(8)の衆に問ふに、知らざるの由を申す。

若しくは息所(多子)の家人宿すか、と。即ち、其の夜宿侍の人に問

ふに、皆知らずと称す。仍りて此の状を答へしめ了んぬ。

### 【注】

(1) 内弁 ないべん 節会などの際、承明門内で指揮を執る公卿。外弁げべん

に対する語。当日は踏歌節会が行われた。伎女が踏歌を

舞う儀式で、『西宮記』『北山抄』などにその次第が載る。

(2) 御酒勅使 みきのちよくし 参会した廷臣に天皇より酒を賜る事を伝え

る使。

(3) 宣命使 せんみやうし 宣命を布告する使。

(4) 祿所 与える祿を一時的に保管しておく場所。ここは

その管理役を指す。

(5) 国栖<sup>くす</sup> 吉野地方などの先住民で、参賀して歌舞を奏する。後には宮中の楽人が奏した。

(6) 南殿<sup>なでん</sup> 紫宸殿<sup>ししんでん</sup>。

(7) 女叙位<sup>をんなじよゐ</sup>の夜 十二日の夜である。

(8) 瀧口<sup>たきぐち</sup>所 清凉殿の一角にある警衛武者の詰所。

十七日 乙未<sup>きのとひつじ</sup> 申<sup>さる</sup>の刻に顕憲(1)朝臣の冷泉家に退出

し、浴湯す。更に關<sup>た</sup>けて帰参す。今麻呂<sup>いままろ</sup>之に同じ。

【注】

(1) 顕憲 治部卿正四位下藤原盛実の息で、頼長の母方の伯父。頼長に近侍する盛憲・憲親・経憲らの父。元永二年(一一一九)七月三十日、藏人左衛門尉にて檢非違使宣旨『中右記』、大治五年(一一三〇)五月十五日任中宮少進『中右記』、他に甲斐權守『御産部類記』天治元年五月二十九日条他)、皇后宮亮『本朝世紀』仁平元年十一月九日条等)等を歴任、久安二年(一一四六)正

月五日叙從四位下(『台記』『本朝世紀』)。頼長との関係においては、家司(『台記』保延二年十月十六日条)・別当(「別記」久安四年十月二十日条)であり、養女多子の家司(「別記」久安四年十月二十二日条)、息師長の政所別当(『兵範記』久安五年十月十九日条)でもあった。また美男と記される(『台記』久安三年六月二十二日条)。なお、「顕憲朝臣の冷泉家」については、『本朝世紀』(仁平元年十一月九日条)に「皇后宮亮顕憲朝臣冷泉西洞院亭」と見える。

十八日 丙申<sup>ひのえさる</sup> 昏に及びて冷泉に退く。浴せんためなり。

更に關<sup>た</sup>けて帰参す。申<sup>さる</sup>の刻に源頼憲(1)(非藏<sup>くらうど</sup>人)太相親の事(2)に依りて除籍す、と云々。実否を問はず暗に罪科を行ふ。未だ其の由を知らず。

別記 太神宮心<sup>しんばしら</sup> 柱<sup>ちやうぎ</sup>の仗議(3) 未だ心葬<sup>しんさう</sup>を除かざる間答ふべきや否やの事

## 【注】

(1) 源頼憲 佐渡守従四位下源行国の息。「従五下 藏人 保元乱斬首」(『尊卑分脈』)。「保元物語平治物語人物一覧」に立項。

(2) 太相劔の事 如何なる事件を指すか不明。

(3) 太神宮心しんばしら柱ちやうぎの仗議 前年遷宮により取り替えたばかりの伊勢神宮の心柱が倒れた一件についての会議。後出の二月十九日条等に記される。心喪中の身で神事に関する議論に加わることへの可否を記したものが。仗議は陣座で開催される評議。なお、当該別記は現存しないようだ。

十九日 丁酉ひのととり 終日天陰。雨らず。今日広隆寺火災(1)、

と云々。建立後未だ火難に遇はず。惜しきかな々々。

別記 女御宣旨の事(2) 上(近衛)、初めて女御(多)の廬(ろ)に渡御の事

## 【注】

(1) 広隆寺火災 上宮太子のために秦河勝が建立したと伝える。現在地は創建の地とは異なる。この火災後再建に着手し、永万元年(一一六五)六月十三日に落慶供養。

なお、「建立後未だ火難に遇はず」と記すが、弘仁九年(八一八)四月、灰燼に帰した由が見えている。「(弘仁)九年四月丙子せ。太秦公寺災。堂塔遺ること無し。」(『類聚国史』卷百七十三 災異七 火)。橋川正『太秦広隆寺史』(京都太秦聖徳太子報徳会 大正十二年)に詳しい。

(2) 女御宣旨の事 去る十日に入内した養女多子に女御の宣旨がこの日下された。この間のことは『婚記』として詳述されている。

廿日 戊戌つちのえいぬ 昨日天陰。今旦小雨。其の後雲騰はり、終日

日の光を見ず。然れども雨ならず。亥あの刻に降雨(行幸(1)還御の後)。人伝ふ、法眼ほふけん静経(2) 昨日勅を奉じて雨降らざるを禱いのる(行幸を遂げん為)、と。今禱いのる所の如し。験力

揚高（翌日、余、其の験を賀す）。午の刻に宿廬より参上す。之より先に召しの仰せ有り、と云々。仍りて、陣に着さず靴を着して大將の出御を待たず（大將門外に参り会ふ）、未の刻に六条に到る。法皇出御の間、余、三衣筥（3）を取る。こと例の如し（年来の例に依りて女院を拝さず。今案ずるに、御元服の日之を拝さず。今日尤も拝観（4）すべし）。御前物陪膳は権大納言伊通卿、役送は宰相・三位等（兼長此の中に在り）。時に近仗（5）皆立つ。成雅（6）朝臣独り居す。諸卿曰はく、立つは非、居すは是、と（余、是非を弁へず）。左右各三曲を舞ふ（龍王（7）・納尊（8）此の内に在り。則助（9）法皇の詔に依りて龍王を奉仕す）。次いで、贈物（伊通・公教両卿之を取る。名を奏せざるは如何）御馬六疋。次いで糸竹の興有り（余、私の筥を持たず。是の故に固辞し隆季（10）朝臣に請ふ。法皇悦ばざるの容有り。仍りて陣官をして内大臣（其の家近隣に在り）の筥を借りて之を吹く。賜はる所の筥吹き得べからざるの故なり）。時に未だ暗に及ばず。乗燭後院司の賞を仰せらる（余、内記

に仰す）。次いで車駕（11）還宮す（之より先に兼長退出す。余、密かに乗車し、佗路より参会す）。入御の後、太相及び余暫く御前に待す。次いで冷泉に退く。浴後、更に關けて帰参す。

別記（12）太相の仰せに依りて吉服を用ゐる事

【注】

（1）行幸 当日、近衛天皇は年頭の拝賀のために、鳥羽院の居所である六条御所に行幸した。

（2）静經 大納言正二位藤原経実の息。興福寺僧。法印、

権大僧都に至る。

（3）三衣筥 僧衣を入れる筥。

（4）拝観 高貴な人に対面すること。

（5）近仗 天皇の警護役をする近衛府の官人や舍人。

（6）成雅 陸奥守源信雅の息。左中将正四位下に至る。同

性愛で忠実・頼長に取り入った男（『台記』『富家語』だが、性格は悪く周囲からの嫌われ者だった（『台記』康治



元年三月四日、同二年正月十二日、三年三月十九日条等。

(7) 龍王 羅陵王。陵王、龍王とも記される。雅楽の曲名。

(8) 納尊 納蘇利か。納蘇利と陵王は番の舞である。

(9) 則助 伯氏。『伯系図』は、光則の孫で府生則友の子

とするが、『樂所補任』は「光則二男。実者弃子取養云々」と記す。↓久寿二年六月一日条の注(1)(九一頁)。

(10) 隆季 中納言正二位藤原家成の息。権大納言従二位に

至る。

(11) 車駕 近衛天皇を指す。

(12) 別記 「別記」該日条に「天子法皇に朝す。余、宿所に於いて吉服を服して供奉す。」と見える。

廿一日 己亥 夜前より降雨。内に候す。上、女御の廬に渡御。今麻呂参入す(尋常の参内の時、尻長・指貫・垂髪)。良久しくして還御。御射六七許りの度有り。両矢的に中る(折敷(1)を以て的と為す)。勅有りて、今麻呂亦之を射る。晩頭に御鞆の興有り。

## 【注】

(1) 折敷 四角形の盆。

廿二日 庚子 晩に及びて晴を得。是の日天子東三条より

四条東洞院に遷幸(1)。巳の刻許りに参上す。俊経(2)参

入し、上、蒙求(3)を読む。申の刻に大相府書を与へ

て曰はく、禅閣の嚴命此の如し。宜しく計らひ示すべし、て

へり。即ち禅閣の御消息を見る。三箇条を載す。一条殿(4)

加階を欲す。已に従一位たり。何事を益し加ふべきか。角振

・隼 宜しく一階を加ふべし。憲雅(5)加階すべし。而れ

ども、重喪の人憚り有りや否や。此等の事左大臣と可否を謀

議し、以て法皇に聞こえよ、てへり。報状に曰はく、一条殿

已に極位(6)、益し加ふべき所無し。竊におもへらく、帝

の高祖母にして齡九旬を過ぐ(是年九十一)。三宮に准ぜらる

る理尤も然るべし。角振・隼の加階亦必ず然るべし。今

夜の遷幸は殊なる吉事に非ず。憲雅の加階何の憚り有らんか、

と。酉(と)の刻に大相府(忠通)参入す。爰に、余、心喪朝服(しんうてうふく)を服して御前(近衛)に参る。此の間太相府宿廬(忠通)に退下す。官奏(くわんそう)(7)有り(吉書(きつしよ)(8))。余、着陣す。範家来たりて太相府女御(忠通)に賜ふの由を告ぐ。仍りて起座し彼の廬(ろ)に向かふ。教長卿をして琵琶を賜はしむ。次いで陣頭に着す。公通朝臣行幸の日時及び神鏡を渡すの日時(9)を下す。即ち神鏡の日時を返し授け(10)(心喪(しんさう)に依るなり)、行幸の日時を外記に下す。了りて奥座に着す。公通朝臣神鏡の日時を内大臣(雅定)に下す。内大臣外座に移る。先に軾(しよく)に下りて後、日時を外記に下し、了りて奥座に帰らんと欲す。余之を止めて曰はく、神加階(11)の事あるべし、と云々。暫く帰り着すなかれ、てへり。範家来たりて、従一位藤原朝臣を三宮に准じ、角振(つのふり)・隼(はやぶさ)の加階、頭成(12)・季家(13)・季兼(14)・清高(15)・信方(16)・光房(17)の加階の事を仰す(三宮已下、皆是家の賞。此の内光房追つて申し請ふ)。内大臣余に問ひて曰はく、一条殿已に尼為り。勅書に法名を載すべきや否や、諸卿(ひそか)と竊(ひそか)に議定すべきの由太相(忠通)の命有り、と。余曰はく、尼皇后為らば転昇

(18)の時如何、と。大臣(雅定)曰はく、宣命(せんみやう)に名を載せず、と。余曰く、法成寺入道相(道長)国未だ遁世せずして准后(じゆこう)の詔(せう)を蒙る(19)。出家後復び此の詔(せう)有り。僧に到りては男の時の名(20)を載すること無し。法名を載するを定め知る。今亦法名を載するは其の難なし。又位祿定(みうくさだめ)(21)の時、命婦(みやうぶ)の歴名(れきみやう)(22)を見るに、尼と雖も皆女名を載す。之を以て之を思ふに、尼女名を失はず。倩(つらつら)事の情を案ずるに男は出家後官位を失ふ。女は出家後之を失はず。然れば則ち女名を失はざる理実(りじつ)に然るべし。女名を載すると雖も亦難かるべし、と。内大臣(雅定)曰はく、故仁和寺法親王(23)除目(ぢよく)の尻付(しづけ)(24)に入道師明親王と注し、入道と書かしむ。従一位藤原朝臣全子(公教)は如何、と。余及び左金吾(公能)・左武衛、皆以て善しと称ふ。大臣(雅定)、大内記長光を召して之を仰す。封戸(ふご)(25)の事を範家に仰す。勅書を新宮に於いて奏すべきの由太相(忠通)の命有り。仍りて余已下卒起す。陣(わき)の腋(わき)に於いて範家をして内大臣(雅定)に仰せて曰はく、公等の議の如く師明親王の例に任せて女名を載せ、入道の字を加へざるは尤も其の理有り、てへり。即ち、太相府(忠通)

・余・宗能・重通等の卿射場<sup>ゆば</sup>に列立す。大相<sup>(忠通)</sup>、公通朝臣<sup>(弓)</sup>、箭<sup>きうせん</sup>を帶す<sup>(近衛)</sup>をして奏せしめ拝舞<sup>あらかじ</sup>したんぬ。余・内相<sup>(雅正)</sup>召しに依りて御前<sup>(近衛)</sup>に参る<sup>(円座を設く)</sup>。予め、上、昼御座<sup>(26)</sup>に御す。太相<sup>(忠通)</sup>几帳<sup>(忠通)</sup>の内に候す<sup>(太相府吉服)</sup>。宗能・重通両卿贈物を取りて御前<sup>(近衛)</sup>に渡る<sup>(須く跪きて名を称ふべし)</sup>。而れども其の事無し。違例の甚だしきなり。了りて馬十疋を奉る<sup>(近衛外衛の将佐、近衛の陣官等之を牽く)</sup>。次いで南殿<sup>(なでん)</sup>に出御。次将度りて後余以下列立す<sup>(余の靴青鈍、靴仙<sup>(27)</sup>、靴<sup>くわたい</sup>帶尋常を用ゐる)</sup>。次いで遷幸<sup>(余、密かに乗車し、佗<sup>た</sup>道より参会す)</sup>。名<sup>なだいめん</sup>謁<sup>(28)</sup>。公教、内府<sup>(雅正)</sup>の前にて名を称ふべし。大失なり。して東三条に帰参す。女御<sup>むすめ</sup>の参入するに依るなり。是の夜内に候す。

## 【注】

- (1) 遷幸 近衛天皇は東三条殿から四条皇居に帰った。十四日後半注(5)参照。

- (2) 俊経 参議正三位藤原顕業の息。参議正三位に至る。

文章博士で近衛・高倉二代の侍読。この時、治部権少輔従五位上。

- (3) 蒙求 唐の李瀚の撰。代表的な初学書。

- (4) 一条殿 藤原全子。右大臣正二位藤原俊家の娘で忠実の母。忠通・頼長等の祖母。

- (5) 憲雅 近江守正四位下源憲俊の息。この時安芸守。↓

久寿二年四月四日条の注(2)(六頁)。

- (6) 已に極位<sup>ごくゐ</sup> 永久三年(一一一五)二月十二日叙従一位。

生存者に与えられる位階は従一位が最高。

- (7) 官奏<sup>くわんそう</sup> 太政官からの奏上。

- (8) 吉書<sup>きつしよ</sup> 任初めなどの際、儀礼的に扱う吉事に関する文書。

- (9) 行幸の日時及び神鏡を渡すの日時 何を指すかいずれも不明。あるいは、後出の「新宮」への行幸か。神鏡についてこれに係わるか。

- (10) 神鏡の日時を返し授け 心喪中のため、神事に係わる執務を避けた。

(11) 神加階の事 角振・隼両社加階の案件。

(12) 顕成 系譜未詳。あるいは左京大夫正三位藤原顕輔の

息（藤原実行の実子）か。そうであるなら、大治五年（一

一三〇）正月二十八日任長門守（『中右記』、保延四年（一

一三八）正月二十二日任備後守（『中右記』、天養元年（一

一四四）十二月二十七日叙爵（『台記』、久安二年（一一

四六）正月二十三日任越中守（『本朝世紀』、同三年正月

五日叙正五位下（『本朝世紀』、保元二年（一一五七）八

月九日叙正四位下（『兵範記』。忠通の嫡室宗子の職事（『兵

範記』久安五年十月二十六日条）で、その息兼実の昇殿

に総角役をしている（『兵範記』保元二年八月十四日条）。

(13) 季家 刑部卿正四位下藤原敦兼の息。中務権大輔正四

位下に至る。「保元物語平治物語人物一覧」に立項。

(14) 季兼 藤原敦兼の息で、(13)の季家の同母兄弟。この

時、備後守正四位下。↓久寿二年九月十四日条の注（1）

（四一頁）。

(15) 清高 大和守従五位下藤原季永の息。天永三年（一一

一二）十一月二十四日正六位上にて任院文殿（『大間成文

抄』、長承元年（一一三二）九月二十九日任藏人（『中右

記』、保延三年（一一三七）正月五日叙爵（『中右記』、

保元二年（一一五七）十月二十九日叙従四位下（『兵範記』）。

また、図書助、筑前権守、上総守等を歴任（『九条家歴世

記録』所引『法性寺殿御記』元永二年二月七日条、『兵範

記』長承元年十一月二十一日条、仁安元年九月六日条、『台

記』久安六年六月一日条他）。元永二年（一一一九）二月

以前より忠通に祇候し（前掲『法性寺殿御記』、家司と

なっている（『兵範記』久寿二年八月二十八日条他）。

(16) 信方 系譜未詳。或いは、権右中弁正四位下藤原光房

の息、伊豆守従五位下が該当するか。

(17) 光房 参議従三位藤原為隆の息。元永三年（一一二〇）

正月二十六日任大膳亮（『大間成文抄』、天治二年（一一

二五）正月二十八日任撰津守（『二中歴』第十、当任歴）、

久安三年（一一四七）正月二十九日藏人・勘解由次官に

て任右少弁（『台記』、同四年五月十二日任勸学院别当（『台

記』、十月十三日任左少弁、六年四月二十八日任權右中弁、五月二十三日叙從四位下、七月八日叙從四位上、七年九月七日叙正四位下、仁平二年（一一五二）十月二十日兼中宮亮（以上『弁官補任』）。

(18) 転昇 位が昇ること。

(19) 准<sup>じゆん</sup>后<sup>こう</sup>の詔<sup>せう</sup>を蒙<sup>もち</sup>る 道長は、長和五年（一〇一六）六月十日、摂政左大臣正二位で准后の宣旨を受けた。また、寛仁三年（一〇一九）三月二十一日に出家するが、五月八日に再度准后の宣旨を受けた。

(20) 男<sup>おとこ</sup>の時<sup>とき</sup>の名<sup>な</sup> 出家前の俗人の時の名。俗名。

(21) 位<sup>ゐ</sup>禄<sup>ろく</sup>定<sup>ぢやう</sup> 四位・五位の者を対象に、物品を支給する人員とそれを提供する国を決める会議。

(22) 命<sup>みこと</sup>婦<sup>ふ</sup>の歴<sup>れき</sup> 名<sup>な</sup> 命婦は一般に四位・五位の無官の女性を指す。歴名は名簿。

(23) 故<sup>こ</sup>仁和寺法親王 三条天皇の皇子師明親王。法名性信。永保三年（一〇八三）二月二十日叙二品。出家後准后の宣旨を受ける。

(24) 尻<sup>しつ</sup>付<sup>つけ</sup> 人名の下に細字で書き込む注記。

(25) 封<sup>ふう</sup>戸<sup>こ</sup> 租庸調を徴収するために支給される戸。

(26) 屋<sup>ひる</sup>御<sup>のおま</sup>座<sup>まし</sup> 天皇の日中の居所。

(27) 靴<sup>くわ</sup>仙<sup>せん</sup> 靴氈。靴の周りを覆う綿布。

(28) 名<sup>な</sup> 謁<sup>だいていめん</sup> 行幸に供奉する王卿が姓名を名乗ること。「鈴

奏の後、問ひて曰はく、誰そ、と。王卿籍を称ふ。即ち還御。」（『北山抄』巻第九 行幸）。

#### (廿二日の続き)

後に聞く。内大臣<sup>（雅定）</sup>勅書を奏す、と云々。

勅す。功有れば必ず酬<sup>むく</sup>ひ、葬<sup>いはん</sup>範<sup>ちく</sup>を竹帛<sup>はく</sup>に貽<sup>のこ</sup>す（1）。積<sup>しやく</sup>善<sup>ぜん</sup>

永く顕<sup>か</sup>れ佳猷<sup>いこう</sup>を典墳<sup>てんぶん</sup>に伝ふ（2）。従一位藤原朝臣全子は撰<sup>（忠通）</sup>録

太相国の祖母なり。四徳俱備し六行（3）相ひ兼ね、二代宰臣<sup>（師通・忠実）</sup>の輔弼<sup>ほひつ</sup>を致すなり。彼の余裔を受けて当時皇后の啓命（4）

を儼<sup>うやうやし</sup>くす。其の曾孫として仍りて縦<sup>た</sup>ひ安禪<sup>あんぜん</sup>（5）の觀

を凝らすとも寧<sup>いづくん</sup>ぞ褒崇<sup>ほうそう</sup>（6）の道を忘れん。宜しく邑土<sup>いふど</sup>

（7）三百戸并びに年<sup>ねん</sup>爵<sup>しやく</sup>（8）内外官三分を授くべし。

主者施行せよ（9）。

久安六年正月廿二日

作者 大内記長光

上卿（10）（雅定）内大臣、中務輔丞参らず。仍りて外記師直を召して之を賜ふ。

入道の字を書かざる事

永保二年（11）二月廿日入道師明親王二品に叙し給ふ。件

の位記状法名に就きて作らるべきか、将又俗名を付くべきかを大内記敦基（12）上卿権中納言伊房（13）卿に申すの処、件

の卿示されて云はく、先例に依るべし、と。大内記申して云

はく、入道親王の叙品今度初めて此の事有り（14）。准拠の

例候ふべからざるか。但し、恵子女王（15）（華山院の外祖母）

三宮に准ずるの時、勅書に保胤（16）外祖母王氏を注す（17）。

是則ち出家以後准後の事有れば法名を書かず王氏を書く。此

の例如何、と。上卿事の由を申す。彼の例に依るべきの由

仰せ下さるるなり。

無品師明親王

右二品とすべし。

中務す。盤石基国、法林材高し。雪山に蹤を尋ぬるに、榮望

を釈宮の月に辞す（18）と雖も、天潢流を分かち（19）寵光

（20）を帝子（21）の星に増さんと欲す。宜しく榮級（22）

に昇らしめ、式て禪扉（23）を照らすべし。前件に依るべし。

主者施行せよ。

永保二年二月廿日

此の例に依りて一条殿准後の時、從一位藤原朝臣と之を書く。

此の旨を以て申し給はしむべきなり。恐々謹言。

三月廿四日

大内記長光

私に言上

此の十余日聊か所勞を療治すること有りて、他事を忘るる如

く候ふ。就中、此の七八日許り増氣有りて起居能はず候ふ。

此の如きの間思ひ忘れ候ひて今に申し候ふなり。恵子女王

准後の勅献すべきの処、此の奏永範（24）朝臣借り取り了ん

ぬ。但し、保胤の作にして文粹に入る所なり。件の勅書ニ

モ出家の由書き候ふ（25）なり。今度師明親王の位記状に就

きて草進する所に候ふなり。保胤、入道王氏を書かず。故京兆

（26）入道無品師明親王と書かず。仍りて今度入道從一位と

書かず候ふなり。

是の夜、雑色弥里<sup>いやくと</sup>（27）殺死に遇ふ。

別記（28）心喪<sup>しんさう</sup>服及び劔帶靴の事<sup>（忠通）（多子）</sup> 太相府女御に賜る事

神事に触れ他に上を譲り行はしむ事<sup>（忠通）（多子）</sup> 心喪を着して准<sup>（多子）</sup>後の

慶拝に立つ事 大相吉服<sup>（忠通）</sup>の事 女御<sup>（多子）</sup>四条皇居に参入の事

# 【注】

（1）彝範<sup>いはん</sup>を竹帛<sup>ちくはく</sup>に貽<sup>のこ</sup>す 規範を歴史に残す。

（2）佳猷<sup>かいう</sup>を典墳<sup>てんぷん</sup>に伝ふ 佳きはかりごとを古代の書に伝え

る。

（3）六行 六つの善行。

（4）啓命 命令を敬う。

（5）安禪<sup>あんぜん</sup> 心身を安らかにして禪定に入る。

（6）褒崇<sup>ほうすう</sup> ほめあがめる。

（7）邑土<sup>いふど</sup> 所領。

（8）年爵<sup>ねんしゃく</sup> 叙爵・加階の請求権。それにより報酬を入手

できる。

（9）主者施行<sup>しゅしやしぎやう</sup>せよ 詔を司る者は施行せよ。

（10）上卿<sup>しやうけい</sup> 公事を行う時の首席。

（11）永保二年 永保三年が正しい。

（12）敦基 文章博士藤原明衡の息。周防守、右京権大夫、

伊予権介、上野守等を歴任。正四位下に至る。文章博士。

（13）伊房 参議従二位藤原行経の息。権中納言従二位に至

る。承暦四年（一〇八〇）八月十四日任権中納言。

（14）入道親王の叙品<sup>じよほん</sup>今度初めて此の事有り 『仁和寺御伝』

に「永保三年三月」廿日直ちに二品に叙す（御年七十九。

僧位の始也。正暦元撰政兼家出家後准三宮の宣旨を蒙ら

せらる。此の例に准じ叙せしめ給ふ、と云々。」と見え

る。

（15）惠子女王 醍醐天皇の孫で中務卿代明親王の娘。藤原

伊尹の室で花山天皇の母懷子を生む。永観二年（九八四）

准後の宣旨を受ける。

（16）保胤<sup>よしげ</sup> 慶滋氏。賀茂忠行の息。詩文に通じ仏教にも傾

倒した。小原仁『人物叢書 慶滋保胤』（吉川弘文館 平

成二十八年)。保胤作成の勅書は『本朝文粹』(巻第二)に「充華山法皇外祖母恵子女王封戸年官年爵勅」として掲載されている。

(17) 外祖母王氏を注す 当該勅書中に「朕外祖母王氏」と見える。

(18) 栄望を釈宮の月に辞す 栄達の望みを捨て仏門に入る。

(19) 天 漢流を分かち 皇室の一族であること。

(20) 寵 光 天皇の恩恵。

(21) 帝子 皇子。

(22) 栄級 名誉ある地位。

(23) 禪扉 禅寺。

(24) 永範 文章博士従四位下藤原永実の息。文章博士正三位に至る。

(25) 出家の由書き候ふ 注(16)に示した勅書中に「家を出て尼と為る」と見える。

(26) 故京兆 京兆は京職の長官。ここは、師明の位記を作成した右京権大夫藤原敦基。

(27) 弥里 系譜未詳。武勇に優れ闘争を好んだ。日ごろの

所業から予想された死に方だったか。「件の弥里人を殺すこと数度、敢へて敵する者無し。」『台記』天養元年十

月八日条)、「雑色弥里人を殺す。而して来たり。白日に人を殺すこと已に三度に及ぶ。其の勇未だ嘗て有らず。」

(同記久安三年三月十日条)などに見える。頼長とは同性愛の関係にあった(同記久安四年八月十七日条)。

(28) 別記 「別記」該日条に各事項についての記載がある。ただし、神事、准后拝賀、大相吉服については記載がない。

廿三日 辛丑 未の時に上、御馬を覧ず。余、簾外に候す(心喪服)。(忠通)太相府簾中に在り。

廿四日 壬寅 午の刻に上、女御の廬に渡御。今麻呂参入す。申の刻に還御。即ち御膳を供す。太相府及び其の室御前に候す。余退下す。御前に於いて殿上人蹴鞠、と云々。



此の間、余、殿上を出で（直衣）、公通朝臣に和泉国の条の事を下す。申文を結ね申す（仰せて曰はく、勘例を諸卿に定め申さしめよ、と）。了りて弁等を召す。各障りを称へて参らず。深更に大炊第に退く。

廿五日 癸卯 宇治に参る（烏帽・心喪直衣）。今麻呂車

の後に在り（袍・指貫・昇殿（先に参る）後初参）。一条殿に准、後の事を賀す。浪後（1）小松殿（2）に詣でて待宿す。今日雪雨交じり降る。寒氣堪へ難し。

### 【注】

（1）浪後 食後。

（2）小松殿 宇治平等院の院家の一つ。宇治における忠実の居所。杉山信三『藤原氏の氏寺とその院家』第八章 平等院の院家（吉川弘文館 昭和四十三年）に説明がある。

廿六日 甲辰 晴れたり。午の時に御前に参り、次いで一条殿に参る（今麻呂車の後に在り）。浪後大炊第に帰る。即ち今麻呂を冷泉に送る。深更に参内し宿候す。

廿七日 乙巳 朝より甚雨、晩に及びて晴を得。未の時

に直衣にて御前に参る。大相府同じく侍す。亥の刻に束帯（心喪）にて御前に参る。女御参上す。後に着陣。召しの仰せの後、範家、直廬に参るべきの状を告ぐ。即ち宮文（1）

を外記に仰せて列立し了んぬ。南大路を経て参向す。次第例の如し。執筆教長卿其の作法頗る優（翌日書を送りて之を賀す）。余の陪膳に五位を用ゐる（四位参らざるに依るなり）。

一条殿の御申文有り。入道の字を書かず。其の尻付に入道の字有るべきや否やを執筆余に問ふ。答へて曰はく鷹司殿の字覚ゆる所なり。慥ならずと。執筆重ねて問ひて云はく、准后兩人姓位惟同じ（3）。分別難かるべし。これを如何せん。愚案ずるに、御名の上の字を注さんと欲す、と。余、之

を許す。又問ひて云はく、太相猶撰政と注すべきか、と。余、太政大臣と注すべきの由を答ふ。今夜顯官の挙(4)有り。丑の刻に大間・成文(5)等を書き入る。余以下退下す。是の夜宿候す。秉燭後除目の前に執筆の相公(6)を招き、直廬に於いて酒肴を羞む。右中弁師信朝臣を招きて和泉条の事の申文を下し、例を勘へしむ。

【注】

(1) 筥文 叙位除目に係わる文書類を一括して筥に収めたもの。

(2) 鷹司殿 源倫子。左大臣従一位源雅信の娘で藤原道長の嫡室。治安元年(一〇二二)二月三十日出家。出家後の女性名の記載法については、『玉葉』(承安四年十二月一日条)に「(前女御琮子当年給) 件(くだん)の女御琮子出家人為り。仍りて前の字を加ふ。永久四年春の大間に女御道子・基子、共に出家為るの人の名、前の字を加ふ。彼の例に随ふなり。」と見える。

(3) 准后兩人姓位惟同じ 忠実の母全子と忠通の嫡室宗子。共に藤原姓で従一位。全子は永久三年(一一一五)叙従一位。宗子は久安五年(一一四九)准後の宣旨を受けるが、この時已に従一位。

(4) 顯官の挙 外記・史・式部民部丞・衛門尉の官への推挙。

(5) 大間・成文 大間は太間書。空席の官職が空白になっている官職表で、任官された者の名を後に書き入れる。

成文は、申請通り任官された者の申文。

(6) 相公 相公は参議の別称。ここは教長を指す。

廿八日 丙午 晴れたり。午の刻に御前に参る。暗に及びて宿廬に退下す。戌の刻に束帶(心喪)して御前に参る。女御参上す。後に陣に向かひて解書二通を下さる。太相公の直廬に参る。執筆着座の後女御の廬に向かふ。三位退出す。

別記 三位輩を免ぜられて退出(1)の事。

## 【注】

(1) 三位輦れんを免ぜられて退出 「別記」該日条に「是の日、

三位輦れんしや車の宣旨を蒙りて退出す。」とその詳細が記される。輦車の宣旨とは、輦車に乗ったまま宮中に出入する

勅許を得ること。輦車は、牛ではなく人が牽く車。

廿九日 丁未ひのとひつじ 師能(1)をして、和泉の条の事の申まうし文ぶみ

を勸例せしめ奉る(疾に依りて持ち来たらず)。去年手書を  
法皇(龜羽)に奉る例に依るなり。去年正月弥陀仏百万遍今日満じ了  
んぬ。

別記 心喪しんざうを服するに依りて除目ぢもくに参らざる事(禁中神斎)

(2)

## 【注】

(1) 師能 大納言正二位源師頼の息。左中弁正四位下に至  
る。この時、右中弁正四位下。官歴は『弁官補任』に詳

しい。見失った漢書のありどころを亡父師頼より夢で告  
げられた説話が伝わる(『古今著聞集』卷第八 孝行恩愛  
第十)。

(2) 別記 「別記」該日条に「今日、春日の使立つ。仍り  
て公家斎なり。」と見える。

## (原文)

久安六年曆 庚午歳 凡三百五十四日 生年三十一

正月小 戊寅

一日 己卯 去夜雨雪深七八寸許今日今麻呂被聴昇殿早朝修  
諷誦(石清水賀茂平野春日大原野吉田祇園角振隼興福寺極樂  
寺法性寺法興寺法成寺平等院已上氏寺延暦寺広隆寺清水寺六  
角堂) 依昇殿事也已刻参議教長卿来(直衣) 書名簿1(先日成  
佐沢之光長隆長親長)

蔭子藤原朝臣隆長

左大臣子

久安六年正月一日

已刻法皇使番長兼賴借<sup>2</sup>賜移馬於兼長余奏恐悅由午刻余束帶了子時右大將実能卿（烏帽直衣淺黄指貫）<sup>3</sup>來今麻呂裝束總角（但右大將役之其總角先日催兼忠而右大將請役仍止兼忠）此間頭公通朝臣來付名簿令奏之先是召陰陽權博士泰親於侍所為問吉時也而忘却不問之總角了待卿等來此間小舍人告昇殿給祿如常及未刻新中納言（忠基）宰相中將（教長）來即於門外乘車（依新中納言在也今麻呂在車後）参院（白川押小路末離宮）公能忠基教長兼長（前駟三人府番長在車前）等卿連車（後聞依忠基命兼長車在前<sup>5</sup>兼長固辞忠基強之）今麻呂立殿上口（余及四卿徘徊同所）公能卿付名簿一通於判官代頭遠（兼兩院判官代仍付兩院名簿）<sup>1</sup>先付院簡（須名簿下後付之而依恐遲引先付之）今麻呂及三卿着殿上（余及兼長不着之）<sup>6</sup>依藏人不候六位判官代付之此間右内兩府参入兩方拝礼了付女院簡余及兩相府在座仍蒙其許召着童子藏人付簡了頭遠伝召童子参御前退下後同車参新院（及暗）公能卿使別当信輔朝臣奏名簿<sup>1</sup>藏人付簡次拝礼了参太相府問伊通卿曰公未蒙准后宣旨兩方拝賀未詳前後為之

如何答曰宜取主公処分即使資憲取之有公等可計決之報問伊通成通兩卿持疑未決此間主公使今麻呂催拝賀兩卿曰大外記師業朝臣参候宜<sup>9</sup>被<sup>10</sup>尋決者使資憲問之申曰准后雖尊論尊卑未得勝摂政者所申未得<sup>11</sup>其理而夜更漸深客卿疲倦余以為於家夫尊於妻縱准后尊於摂政先夫後妻有其理即起座使資憲申候由於主公可許後進庭中再拝了婦入使雅国朝臣（准后職事）申小君如初再拝（准后拝賀有無先日請処分於太相公々謙退辞之余示告卿等強以拝賀焉明日公与書悅謝）了詣高陽院参御前（兼長今麻呂同）<sup>12</sup>童子付簡（先成隆付名簿於藏人令啓上）後参内詣太后御在所今麻呂応<sup>13</sup>恩喚入簾中与諸卿共拝賀了着殿上今麻呂同之（火爐下）藏人右少弁範家付簡後今麻呂参御前（頭為通朝臣扶持）次小朝拝（兼長未被聽昇殿立之失也）次押笏着左仗節会儀如常欲着兀子之間雨雪仍使範家奏可改裝束之由仰同弁（裝束弁不候）諸卿昇殿（兼長同之）後入御称疾取替中納言公教卿笏伴両息帰家（公教卿辞曰近代無中納言奉仕之例余曰道方為中納言奉仕之（前二条関白之讓）<sup>16</sup>是已中古之例也強替笏退出）兼長向大將廬（東面）次将元三向大將家礼也院御廐舍人居飼

給祿返献御馬了翌日左金吾（公教）<sup>17</sup>使清職示不可還笏々紙等之状（依先例也）

別記 無四方拝事 雖無召着吉服參節会事 初吹笙事 齒堅

不用魚類事（不差<sup>18</sup>愛敬鮎） 見鏡<sup>19</sup>着心喪服事 節供事（羞魚

家司失也） 除服後初出仕無申文事<sup>20</sup>

（校訂）

1、底本「薄」。他本に従う。 2、底本「供」。平並びに京

の傍記に従う。 3、底本「指責来」。他本に従い「来」を除

く。 4、底本「侍々所」。京「<sup>於</sup>侍々<sup>（ミセケチ）</sup>所」に従う。

5、底本「右」。他本に従う。 6、底本「佐」。他本に従う。

7、底本「次」。他本に従う。 8、底本「至」。他本に従う。

9、底本「催」。平並びに東の傍記に従う。 10、底本なし。

他本により補う。 11、底本は別字。他本に従う。 12、底

本なし。他本により補う。 13、底本「息」。他本に従う。

14、底本なし。字により補う。 15、底本「問」。他本に従う。

16、底本なし。他本により補う。 17、他本の割書形式に従

う。 18、底本「受」。他本に従う。 19、底本「鏡間」。他

本に従い「問」を除く。 20、底本「反」。他本に従う。

二日 庚辰 及暗着衣參高陽院土御門前齋院（今在世尊寺辺）

別記 元三心喪服事

三日 辛巳 不他行使範家奏成隆所望事（件事密奉書申法皇

及大相公）今麻呂參高陽院

四日 壬午 晴辰刻參内依御元服也已一刻太政殿下參内唐車

（賜法皇車）上達部從之（伊通宗能重通季成忠雅忠基經定經

宗資信）殿上人前駟進射場奏慶（重喪之間<sup>2</sup>任官叙位人不奏慶

而今被奏可傾奇者也）了參朝餉御元服後於東北門前乘車（余

賽簾殿下辞之使頭為通朝臣賽乘之）參院（白川押小路末離宮）

余從之（始相從卿相猶在）於東中門使美作守家長朝臣奏候由

此間余以下跪地家長告聞食状後拝舞了家長告召即參上侍透渡

殿（候円座上簾中）須臾賜馬（藏人五位二人牽之二人秉燭）

太相公降自中門廊内方（不着沓）搢笏（頭為通朝臣搢之）取

右綱一拝退去之間余（着沓）搢笏取同綱（太相公拔笏）賜前

駟為基朝臣（余拔笏此間太相謝曰可謂輕々）次太相公詣女院殿<sup>5</sup>

上（先之殿下示伊通卿曰至于女院古不奏慶唯詣殿上如何卿諾

之)使顯遠啓參入由依召參入簾中頃之退出有諸卿自此可帰家之命仍余詣統子内親王家謁女房退出

別記

入内日時事 同装束始事 取出平等院調度事<sup>7</sup> 御元服事 吉服事

(校訂)

1、底本「倍」。他本に従う。 2、底本なし。久により補う。  
3、底本なし。他本により補う。 4、底本「衣」。他本に従う。  
5、底本「叙」。他本に従う。 6、底本「工」。他本に従う。  
7、底本「慶」。他本に従う。

五日 癸未 別記 御元服後宴事<sup>1</sup> 吉服事

(校訂)

1、底本「吉服事」なし。他本により補う。

六日 甲申 会橋氏大夫<sup>1</sup>六人举当爵運者(成佐伝命)即舉行則令敦任書名簿加名付大外記師業朝臣(成佐伝之)今夕叙位仍有此事(初度之外不扨吉日)追例唯長者举之而余恐忤衆心每年会氏人耳是夜雨雹雷電<sup>4</sup>

(校訂)

1、底本「太」。他本に従う。 2、底本「仕」。他本に従う。  
3、底本「薄」。他本に従う。 4、底本「電」。他本に従う。

七日 乙酉 晴大風時々飛雪不及湿衣午刻使藏人藤国綱賜御書於三位同刻参内宴会後太后行啓三条(上皇宮)余扈從(乗車)為寄御車也移御後参院使重成奏成隆事(少納言成隆依余举夜前叙四位不避官件状範家送書告之四位少納言大入道殿及能信能季等卿有此恩他無其例)畏申由帰家

別記 御書事 賀表事 恩詔事 節会事 吉服事

(校訂)

1、底本「信」。他本に従う。

八日 丙戌 終日雪灑不堪窮屈不能朝参依有障不参八省之由触外記

別記 賜牛於法務寛信事

(校訂)

1、底本「何」。書一に従う。 2、底本「以」。平に従う。  
十日 戊子 平明参内未刻退出

別記 入内事

十一日 己丑 束帶之次着陣（為入上日）即起座外記史等不候仍着陣之由触大外記家

別記 後朝使事 息所方饗事

十二日 庚寅 束帶之次着陣是夜女叙位今日今麻呂參御前依勅書以呂波

別記 息所方饗事 催餅事

十三日 辛卯 十日以後無風雨之難今日雨降天氣有情未刻參院着千日講座頃之帰自今日用心喪服

十四日 壬辰 去夜雨雪早朝庭白<sup>1</sup>今年余寒難耐風痾頻侵而息所參上之間不能退私身侍禁中欠怠王事可謂不忠是以相扶風痾慙參八省去夜御齋会宣命前一日內記付内侍奏之已奏了否大外記長光朝臣答曰不存此事驚此仰可奏所答不足云申刻服心喪朝服參御前于時今麻呂同侍有勅帶弓箭（件弓箭自本在御所<sup>2</sup>）即參八省入自待賢門着東廊東座（右兵衛督公能卿遇<sup>5</sup>門下相伴參入同着座）先之新中納言忠基卿右大弁資信朝臣（參議）在座余召外記問諸司具否申參具由召行事右少弁範家問僧參否申十

五口參入由仰可令打鐘之由此間大外記師業朝臣參來申曰堂童子五位一人候（內藏助定輔）此外大夫依侯院宮悉免雜役仍初日亦一人而範家朝臣申曰長承之比六位奉仕由有所見者今日使六位勤之如何仰曰六位堂童子未有證拠初日一人今日亦同有何難乎弁少納言<sup>6</sup>外記史各一人出居後着堂上座（此間使召使仰可以余前<sup>7</sup>駈憲親<sup>8</sup>為堂童子之由於大外記）此間權中納言忠雅卿參入着座兩師登高座後奏左右舞各二曲（左四人之中二人着青裝束仍使<sup>9</sup>召使迫入二人立舞）于時秉燭雖入夜依功德不停由見寬弘四年小野記仍令遂奏二曲講說終頭雜人奪取<sup>10</sup>五穀（地布依風吹不撤）使召使迫之先例可禁雜人之由使弁伝仰檢非違使而檢非違使未參仍不得仰之公事陵夷<sup>11</sup>不可為之行香（左方公卿五人弁一人少納言一人左方堂童子憲親右方五位六位外記史式部權少輔成佐右方堂童子定輔）後帰座帶劔（他卿起座令僕從帶之可謂無礼）衆僧退下（出自後戸<sup>15</sup>不知是非）後帰着東廊（余及右大弁着東座此間宰相中将教長卿參入佇立幔外余問其故右兵衛督曰着待処分歟余示可着由即進着座公卿在堂上之間儲饌於座前）一献少納言成隆朝臣（四位少納言<sup>17</sup>）献盃（先居座後北

方余命居南方依申文時可南向也）史季直（今年叙爵者）<sup>1</sup>取瓶（取瓶者二人進東西座今唯一人失札雖仰其由不出来）巡行後依余命右大弁起座頃之還着本座示申文氣色余揖許大弁微音称唯左顧右大史惟宗信弘挿申文於文杖入自南幔<sup>20</sup>侯壇上（南第二間）余左顧揖之史進就軾此間余南向置笏（右）取文持之史揖後置文披見如常了卷表紙置座端席上（文首在西）史取之先結申治部省解（其詞治部省乃申<sup>21</sup>セ<sup>21</sup>ル諸宗乃学士等乃來名申<sup>22</sup>上<sup>23</sup>ト申<sup>24</sup>セル事）余揖許次結申僧名（其詞僧綱乃申<sup>24</sup>セル御齋会乃法師等乃來名申<sup>25</sup>上<sup>26</sup>ト申<sup>27</sup>セル事）余仰申給次結申加供文（其詞家々乃申<sup>28</sup>セル加供乃文申<sup>29</sup>上<sup>30</sup>ト申<sup>31</sup>セル事）余仰申給史每度高唯卷文加杖退出余西向余先年行此事時北向又平座見參及御読経卷数皆向座上見之是用土御門右府御説也而見北山抄小野年々記可向座下之由所見也（北山抄小野記年來所見也而依非先祖不用此説唯據土御門説）加之一条左大臣（雅信）南向由見寛仁三年小野記先年禪閣語曰九条殿委曲説已絶御堂為一条左大臣聳受彼大臣訓其説于今不絶者御堂未流豈背彼相府説乎是以今日改用南面之儀（未參之先送書内府曰年來拋土御門殿説用北

面之儀而一条殿南面由見或記仍欲改用彼儀者自八省入内之間報狀到来曰八省東廊申文時向座上之由如被仰見土御門殿記仍所存其旨也但一条殿令向座下給<sup>32</sup>更不可有異議<sup>33</sup>歟如此事被仰下尤為名聞）二献右少弁範家献盃流巡了示右大弁召王大夫<sup>35</sup>正親正顯広王入自南幔着座（北面）次着膳於王大夫（用机）此間右大弁申云大臣手長何人可奉仕乎仰曰五位外記史（赤衣）奉仕已為定例今何及問<sup>40</sup>（見長和元長徳四小野記）次羞粉熟（大外記師業朝臣為余手長史役送（今案外記可役仕）納言參議手長外記役送史）箸下後居飯汁（余手長飯師業朝臣汁左大史師經宿禰（俱師經可奉仕飯汁異人不可然）納言參議手長役送同上）箸下後三献成隆朝臣献盃（余問一人再献之例答曰依無佗人再献有先例之由範家所申也仍從彼命耳）流巡及王大夫次使召使催宣命内記挿杖奉之南向取之見了内記退後正笏目王進給宣命出自北幔後召弁（範家）問布施堂事具否申具由次入自昭訓門經廊<sup>46</sup>内及大極殿東北壇上北登廊着布施堂（自座後着之此間教長卿触可供奉御堂之由退出衆僧予着座）解劔（或曰解劔着座理不可然仍着後解之）置笏俱三押了把笏次王大夫着座



宣制退下次大藏権少輔致遠授布施目錄於三僧（挿文杖）次同  
 史生昇三僧持辛櫃置其前次同史生昇衆僧布施置各前（從儀師  
 臨其所）次堂達打磬一度（丞触手於案後可打之今早打失也）  
 次大藏丞一人到仏布施案下懸手（丞不存此由余催仰令進諸卿<sup>47</sup>  
 曰近年無此事故丞及諸人不存之）次呪願了余以下置笏但一拝  
 （此拝先例多把笏而拋北山抄置之）次帶劔把笏

## （校訂）

- 1、底本「自」<sup>白イ</sup>。校合並びに他本に従う。 2、底本「卿」。  
 他本に従う。 3、底本「入」。他本に従う。 4、底本「八」。  
 他本に従う。 5、底本「過」。他本に従う。 6、底本なし。  
 他本により補う。 7、底本「舍」。他本に従う。 8、底本  
 「雜」。他本に従う。 9、底本なし。他本により補う。 10、  
 底本「所」。他本に従う。 11、底本「凌」。他本に従う。  
 12、底本「得」。他本に従う。 13、底本なし。他本により補  
 う。 14、底本「今」。他本に従う。 15、底本「出」<sup>白イ</sup>後」。  
 他本に従う。 16、底本「○非」<sup>是イ</sup>。校合並びに他本により補  
 う。 17、底本「タ」。他本に従う。 18、底本「所」。他本

- に従う。 19、底本「頭」<sup>願</sup>。傍記並びに他本に従う。 20、底  
 本「帷」。宇に従う。 21、底本「已」。他本に従う。 22、  
 底本「中」。他本に従う。 23、底本「下」。他本に従う。  
 24、底本「間」。他本に従う。 25、底本「乃申」。他本に従  
 い「申」を除く。 26、底本「地」。他本に従う。 27、底本  
 「地」。他本に従う。 28、底本「記」<sup>説イ</sup>。校合並びに他本に従  
 う。 29、底本「也跪」。宇「已絶」に従う。 30、底本「省」。  
 他本に従う。 31、底本「向」。宇に従う。 32、底本「処」。  
 宇に従う。 33、底本「儀」。宇に従う。 34、底本なし。他  
 本により補う。 35、底本「權」。洋「權」<sup>王カ</sup>の傍記に従う。  
 36、底本「師」。他本に従う。 37、底本「直」。平に従う。  
 38、底本「今」。京・洋「今」<sup>入カ</sup>の傍記に従う。 39、底本「日」。  
 他本に従う。 40、底本「間」<sup>問敷</sup>。傍記並びに他本に従う。  
 41、底本「但」。他本に従う。 42、底本「目奏」<sup>自カ</sup>。疑問ある  
 が、平・書三「目王」に従う。 43、底本「地」。他本に従う。  
 44、底本「其」。他本に従う。 45、底本「今日」<sup>入自</sup>。洋「今日」  
 の傍記に従う。 46、底本「門」<sup>廊</sup>。傍記並びに他本に従う。

47、底本「近」。他本に従う。 48、底本「不」<sup>人カ</sup>。傍記並びに他本に従う。

(十四日の続き)

衆僧出北戸後起座(右兵衛督曰近例起座不待僧出余曰件事非礼今日可復礼也)自本道出昭訓門(召使取松前行到待賢門依入夜無御前)於待賢門外乘車(忠基卿自此參円宗寺)参内(東三条)到二条油小路降車入自西門着右近陣座仰陣官敷軾<sup>2</sup>少納言成隆朝臣着座(弁自八省参円宗寺)次将良久不見来使陣官召求頭中将公通朝臣少将公保参来公通朝臣着座公保申未着陣之由仰曰雖不着座猶須献盃故予居肴物(須着座後居之歟但長久四年予居見土御門記)一献公通朝臣酌(繼)余自座下取盃流巡右大弁軾<sup>5</sup>少納言次仰陣官召外記史大外記師業朝臣左大史師経宿禰及六位外記史着座(西落板敷)此間衆僧推参使陣官禦之二献公保(両献将監取瓶)右大弁軾頭中将々々々軾少納言陣官行酒於外記史(此事不知前例仍問諸卿答曰近例如此今案理尤可然)此間示右大弁召外記々(六位)起座進<sup>7</sup>候北庭余右顧目之外記称唯就軾仰令入僧外記出西門伝仰僧等参入度南

庭徘徊東中門辺次将二人不能三献即羞湯漬(余已下将監手長)下箸次羞薯蕷粥(不待居了食之付甘美不残一枝)藏人源清季来召(須称御装束了称召失也)余已下正笏揖之經南庭着殿上出居将着了参上法務寛信遲参時刻推移及子刻参入僧侶着座法橋慈源進<sup>8</sup>御前読僧名(余仰加持香水後可読之由寛信曰前後有両説余慈許之)復座後寛信加持香水復座了權少僧都尋範召番論義僧令奉仕如常最後番仲寛随喜<sup>10</sup>公卿置笏仲寛帰座後取笏起座(先之両納言退昇所候唯余与右大弁也)到殿上戸前(年中行事障子与戸之間也)跪(左膝)摺笏取祿(六位授之余仰令五位(俊光)授之五位藏人不候)自中門廊北行自簀子西行入自北面僧綱座東跪寛信前授之寛信相跪受之復座余拔笏起右廻(大内左廻是御前方廻也)自簀子復座次右大弁授尋範僧都次<sup>11</sup>出居(帶劔挿笏)及侍從授祿於僧綱凡僧了僧侶起座余仰可有布施呪願之由威儀師迷惑余教喻威儀師立座前称布施呪願僧侶不動余示第一人奉仕由即寛信立呪願(右大弁曰近代無此儀是以諸僧無知之故也)之後復座一々退出次余以下退下次出居退下余向息所方参上後詣延勝寺先之法皇美福門院御此寺事了還

御卿相步行（余同之）次帰參禁裏于時東方既明今日御論義間  
今麻呂着尻長指貫侍御在所簾中

翌日（十五日）使覺敏得業問寬信曰西北<sup>1</sup>抄小野年々記皆加

持香水後説論義僧名（送此等記令見）夜前陳有兩說之由非無

所疑宜見證文報命曰先師嚴覺教有兩說之由後於先父為房卿家

勘吏部王記実有二說即送勘文一紙

#### 先説奏後灑水説

李部王記第二云（部類）延長三年正月十四日御齋会了云々清

涼殿下東廂御簾当額間置香水云々群臣着座之後僧等入着座律

師進説僧綱解文次大僧都觀賢進散香水次僧綱唱問答名令論

義

同六年正月十四日云々会了内論義如常云々延徹律師進立問答

元子間東説法師來名觀宿僧都持五股居香水北加持以楊枝散之

衆僧論義及賜祿如例

#### 先灑水後説奏説

同記同卷延長七年<sup>2</sup>濟高律師一度承平二年会理律師一度同七

年天慶二年已上貞崇僧都二度天曆四年同五年天德五年已上寬

空僧正三度件四人九度皆灑水前奏後（如下給諸記）<sup>28</sup>

先年先師嚴覺大僧都与禪嘗僧都此事相論嚴覺本自存有兩說之  
由禪嘗申奏前灑水後之旨而此説文兩說分明候歟<sup>29</sup>

久安六年正月十六日

法務寬信上

余見之承伏不見彼記猥起疑問頗以有恥寬公非唯兼学顯密亦已  
涉獵書記可尊可美

別記 心喪束帶事

#### （校訂）

1、底本なし。東・京の傍記により補う。 2、底本は別字。

他本に従う。 3、底本を含む諸本「預」。私に改める。 4、

底本「預」。他本に従う。 5、底本は別字。他本に従う。

6、底本なし。書一並びに他本の傍記により補う。 7、底

本「近」。他本に従う。 8、底本「近」。他本に従う。 9、

底本「目」。他本に従う。 10、底本「書」。洋「書」<sup>喜力</sup>の傍記

に従う。 11、底本「以」。他本に従う。 12、底本なし。書

一並びに他本の傍記により補う。 13、底本「復」。他本に従

う。 14、底本「三」<sup>二カ</sup>。傍記並びに他本に従う。 15、底本

「陣」。書一並びに他本の傍記に従う。 16、底本「等」<sup>王カ</sup>。傍

記並びに他本に従う。 17、底本「等」<sup>王カ</sup>。傍記並びに他本に

従う。 18、底本「近」。他本に従う。 19、底本なし。他本

により補う。 20、「各」とする伝本あり。 21、底本「龍」。

『御質抄』の引用本文に従う。 22、底本なし。『御質抄』の引

用本文により補う。 23、「楊枝杖」とする伝本あり。 24、

底本「奏」。書二並びに洋の傍記に従う。 25、底本「偕」。

他本に従う。 26、底本「裏」。『御質抄』の引用本文に従う。

27、底本「宗」。他本に従う。 28、底本「可」<sup>下イ</sup>。傍記並びに他

本に従う。 29、底本「予」<sup>而カ</sup>。平「予」<sup>而カ</sup>の傍記に従う。 30、

底本「亦一」。他本に従い「一」を除く。

十五日 癸巳 未刻参四条皇居見息所廬右大将親隆朝臣参会

頃之退大炊第（依為無憚之日初退私）浴湯後着烏帽参院于時<sup>1</sup>

戊刻弥陀講了帰大炊後万寿麻呂於出居加元服依宇治仰也此間<sup>2</sup>

右大将宰相中将教長卿来会脂燭六位（憲頼有忠）理髮為夷引

入（用烏帽）教長卿前物陪膳以長此間余不用吉服依宇治仰賜

余烏帽本結指貫（薄色堅文織物）引入帰家後禅閣使仲行送劔

馬等今夕今麻呂初宿九禁

（校訂）

1、底本「洛」。他本に従う。 2、底本なし。他本により補

う。

十六日 甲午 申刻参高陽院及晚参新院須與参内（心喪服）

服吉服行内弁御酒勅使教長卿宣命使同之祿所経宗朝臣国栖立

楽余降殿催之依御物忌不御南殿事了不臨祿所是夜宿息所廬辺

今麻呂猶宿内西刻範家問云女叙位夜大相府参入之後持衣裳劔<sup>1</sup>

笏者入水門之間有追還者問瀧口所衆申不知之由若息所家人宿

歟即問其夜宿待之人皆称不知仍令答此状了<sup>2</sup>

（校訂）

1、底本「索」。他本に従う。 2、底本「今」<sup>令イ</sup>。傍記並びに

他本に従う。

十七日 乙未 申刻退出顯憲朝臣冷泉家浴湯更闌帰参今麻呂

同之

十八日 丙申 及昏退冷泉為浴也更闌帰参申刻源頼憲（非藏

人）除籍依太相劔事云々不問実否暗行罪科未知其由<sup>1</sup>

別記 太神宮心柱仗議未除心喪間可答否事

(校訂)

1、底本「来」。他本に従う。 2、底本「伏」。他本に従う。

十九日 丁酉 終日天陰不雨今日広隆寺火災云々建立後未遇<sup>1</sup>

火難惜哉々々

別記 女御宣旨事 上初渡御女御廬事

(校訂)

1、底本「過」。他本に従う。 2、底本「大」。他本に従う。

3、底本「情」。他本に従う。

廿日 戊戌 昨日天陰今旦小雨其後雲騰終日不見日光然而不

雨亥刻降雨(行幸還御之後) 人伝法眼静経昨日奉勅禱不降雨

(為遂行幸) 今如所禱驗力揚高(翌日余賀其驗) 午刻自宿廬

參上先之有召仰云々仍不着陣着靴不待大将出御(大将参会門

外) 未刻到于六条法皇出御之間余取三衣宮如例(依年来例不

拜女院今案御元服日不拜之今日尤可拝觀) 御前物陪膳權大納

言伊通卿役送宰相三位等(兼長在此中) 于時近仗皆立成雅朝

臣独居諸卿日立非居是(余不弁是非) 舞左右各三曲(龍王納<sup>6</sup>

尊在此内則助依法皇詔奉仕龍王) 次贈物(伊通公教兩卿取之

不奏名如何) 御馬六疋次有糸竹之興(余不持私笙是故固辭請於<sup>7</sup>

隆季朝臣法皇有不悅之容仍使陣官借内大臣(其家在近隣) 笙

吹之所賜之笙不可吹得之故也) 于時未及暗秉燭後被仰院司賞

(余仰内記) 次車駕還宮(先之兼長退出余密乘車自佗路参会)

入御後太相及余暫侍御前次退冷泉浴後更闌帰参

別記 依太相仰用吉服事

(校訂)

1、底本「説」。京「説」<sup>後力</sup>の傍記に従う。 2、底本は別字。

他本に従う。 3、底本「刀」。他本に従う。 4、底本「々」。

内一に従う。 5、底本「伏」。他本に従う。 6、底本「綱」。

他本に従う。 7、底本を含め諸本「令」。史料大成本に従う。

8、底本「洛」。他本に従う。

廿一日 己亥 自夜前降雨候内上渡御女御廬今麻呂参入(尋

常参内時尻長指貫垂髪) 良久還御有御射六七許度両矢<sup>1</sup>中的(以

折敷為的) 有勅今麻呂亦射之晚頭有御輿

(校訂)

1、底本「失」。他本に従う。

廿二日 庚子 及晚得晴是日天子自東三条遷幸四条東洞院已刻許參上俊經參入上読蒙求申刻大相府与書曰禪閣敕命如此宜計示者即見禪閣御消息載三箇条一条殿欲加階已為從一位可益加何事乎角振隼宜加一階憲雅可加階而重喪人有憚否此等之事与左大臣謀議可否以聞法皇者報狀曰一条殿已極位無所可益加竊以為帝之高祖母齡過九旬（是年九十一）被准三宮理尤可然角振隼加階亦必可然今夜遷幸非殊吉事憲雅加階有何憚乎西刻大相府參入爰余服心喪朝服參御前此間太相府退下宿廬有官奏（吉書）余着陣範家来告太相府賜女御之由仍起座向彼廬使教長卿賜琵琶次着陣頭公通朝臣下行幸日時及渡神鏡之日時即返授神鏡日時（依心喪也）下行幸日時於外記了着奥座公通朝臣下神鏡日時於内大臣々々移外座先下貳後下日時於外記了欲歸奥座余止之曰可有神加階事云々暫勿歸着者範家来仰從一位藤原朝臣准三宮角振隼加階顯成季家季兼清高信方光房加階事（三宮已下皆是家賞此内光房追而申請）内大臣問余曰一条殿已為尼勅書可載法名否与諸卿竊可議定之由有太相命余曰尼為皇后

者転昇之時如何大臣曰宣命不載名余曰法成寺入道相国未遁世蒙准后詔出家後復有此詔到于僧者無載男時名定知載法名今亦載法名無其難又位祿定時見命婦歷名雖尼皆載女名以之思之尼不失女名情案事情男出家後失官位女出家後不失之然則不失女名理実可然雖載女名亦可無難内大臣曰故仁和寺法親王除目尻付注入道師明親王令書入道從一位藤原朝臣全子如何余及左金吾左武衛皆以称善大臣召大内記長光仰之封戸事仰範家勅書於新宮可奏之由有太相命仍余已下卒起於陣腋範家仰内大臣曰如公等議任師明親王例載女名不加入道字尤有其理者即太相府余宗能重通等卿列立射場大相使公通朝臣（帶弓箭）奏拜舞了余内相依召參御前（設円座）予上御昼御座太相候几帳内（太相府吉服）宗能重通両卿取贈物渡御前（須跪称名而無其事違例之甚也）了奉馬十疋（近衛外衛將佐近衛陣官等牽之）次出御南殿次将度後余以下列立（余靴青鈍靴仙靴帶用尋常）次遷幸（余密乘車自佗道参会）名謁（公教可内府之前称名大失也）帰参東三条依女御参入也是夜候内後聞内大臣奏勅書云々勅有功必酬貽彝範於竹帛積善永顯伝佳猷於典墳從一位藤原朝

臣全子者撰録太相国之祖母也四德俱備六行相兼二代幸臣之致輔弼也受彼余裔當時皇后之儼啓<sup>25</sup>命也為其曾孫仍縱凝安禪之<sup>26</sup>觀<sup>27</sup>寧忘褒崇之道宜授邑士三百戸并年爵内外官三分主者施行

久安六年正月廿二日 作者大内記長光

上卿内大臣 中務輔丞不參仍召外記師直賜之

不書入道字事

永保二年二月廿日入道師明親王叙二品給伴位記狀就法名可被作歟將又可付俗名歟<sup>28</sup>大内記敦基申上卿權中納言伊房卿之处件卿被示云可依先例大内記申云入道親王叙品今度初有此事准拋例不可候歟但惠子女王（華山院外祖母）准三宮之時勅書保胤注外祖母王氏是則出家以後有准后事不書法名書王氏此例如何上卿申事由可依彼例之由被仰下也

無品師明親王 右可二品

中務盤石基国法林材高雪山尋蹤<sup>29</sup>雖辞榮望於积宮之月天潢分流欲增寵光於帝子之星宜昇榮級式照禪扉可依前件主者施行<sup>32</sup>

永保二年二月廿日

依此例一条殿准后之時<sup>33</sup>從一位藤原朝臣書之以此旨可令申給也

恐々謹言

三月廿四日 大内記長光

私言上

此十余日聊有療治所劳如忘他事候就中此七八日許有増氣不能起居候如此之間<sup>34</sup>思忘候于今申候也惠子女王准后勅可献之处此奏永範朝臣借取了但保胤作所入文粹也件勅ニモ書出家之由候也今度就師明親王位記狀所草進候也保胤不書入道王氏故京兆不書入道無品師明親王仍今度不書入道從一位候也<sup>36</sup>

是夜雜色弥里遇<sup>37</sup>殺死

別記 心喪服及劔帶靴事 太相府賜女御事 触神事讓他上令行事 着心喪立准后慶拜事 大相吉服事 女御參入四条皇居事

（校訂）

1、底本なし。他本により補う。 2、底本なし。字により補う。 3、底本「候以」。他本に従い「候」を除く。 4、底本なし。字により補う。 5、底本「付」。他本に従う。 6、底本「内記臣々」。他本「内大臣々々」に従う。 7、底

本なし。他本により補う。 8、底本「付」。字並びに他本の傍記に従う。 9、底本「催」。字に従う。 10、底本「候也」。字「以之」に従う。 11、底本「名々」。他本に従う。 12、字「且」。 13、底本「慈<sup>師</sup>」。傍記並びに他本に従う。 14、底本は別字。他本に従う。 15、底本「慈<sup>師也</sup>」。底本を含む他本の傍記に従う。 16、底本なし。京「名〇加<sup>不</sup>」に従う。 17、底本「役目座<sup>設方候力</sup>」。他本「設円座」に従う。 18、「用」とする伝本あり。 19、底本「例」。他本に従う。 20、底本「奉<sup>奉也</sup>」。傍記並びに他本に従う。 21、底本「紙ノ」。他本に従う。 22、底本「夫」。他本に従う。 23、「東宮」。私に「宮」を除く。 24、底本「始」。他本に従う。 25、底本「令」。字に従う。 26、底本「歛<sup>観イ</sup>」。傍記並びに他本に従う。 27、底本「忌<sup>忘カ</sup>」。傍記並びに他本に従う。 28、底本「僧」。字に従う。 29、底本「難」。他本に従う。 30、底本「宣<sup>者</sup>」。他本に従う。 31、底本は別字。他本に従う。 32、底本「故<sup>者</sup>」。傍記並びに他本に従う。 33、底本「侍」。他本に従う。 34、底本「持<sup>此カ</sup>」。傍記並びに他本に従う。あるいは「然」とする

伝本に従うべきか。 35、底本「思給忘示合不令申候也」。字

「思忘<sup>(墨滅)</sup>」候于今不申候也」に従う。 36、底本「出<sup>書カ</sup>」。傍

記並びに他本に従う。 37、底本「過」。他本に従う。

廿三日 辛丑 未時上覽<sup>1</sup>御馬余候簾外(心喪服) 太相府在簾

中

(校訂)

1、底本「覚」。他本に従う。

廿四日 壬寅 午刻上渡御女御廬今麻呂参入申刻還御即供御

膳太相府及其室候御前余退下於御前殿上人蹴<sup>1</sup>鞠云々此間余出

殿上(直衣) 公通朝臣下和泉国条事申文結申(仰日勘例令諸

卿定申)了召弁等各称障不参深更退大炊第

(校訂)

1、底本「就<sup>職カ</sup>」。傍記並びに他本に従う。

廿五日 癸卯 参宇治(烏帽心喪直衣) 今麻呂在車後(袍指

貫昇殿(先参)後初参) 一条殿賀准后事宸後詣小松殿侍宿今

日雪雨交降寒氣難堪

廿六日 甲辰 晴午時参御前次参一条殿(今麻呂在車後) 宸



後婦大炊第即送今麻呂於冷泉深更参内宿候

廿七日 乙巳 自朝甚雨及晚得晴未時直衣参御前大相府同侍

亥刻束帶（心喪）<sup>1</sup> 参御前女御参上後着陣召仰後範家告<sup>2</sup>可参直廬<sup>3</sup>

之状即仰筥文外記列了<sup>4</sup>經南大路参向次第如何執筆教長卿<sup>5</sup>其

作法頗優（翌日送書賀之）<sup>6</sup> 余陪膳用五位（依四位不参也）有

一条殿御申文不書入道字其尻付可有入道字否執筆問余答曰鷹<sup>8</sup>

司殿出家後除目尻付猶不加入道字歟側所覺也不慥執筆重問云

准后兩人<sup>9</sup>地位惟同可難分別為之<sup>10</sup>如何愚案欲注御名上字余許之

又問云太相猶可<sup>1</sup>注攝政歟余答可注太政大臣之由今夜有顯官举

丑刻書入大間成文等余以下退下是夜宿候秉燭後除目前招執

筆相公於直廬羞酒肴招右中弁師信朝臣下和泉条事申文令勘例

（校訂）

1、他本の割書形式に従う 2、底本「吉」。他本に従う。

3、底本「度」<sup>度</sup>。傍記並びに他本に従う。 4、底本「莒」。

他本に従う。 5、底本「即」。他本に従う。 6、洋「賞」。

7、底本「車」。他本に従う。 8、底本「応」。他本に従う。

9、底本「推」。字に従う。 10、底本「其」。字に従う。

11、底本「給」。字に従う。 12、底本「奉」。字「奉」<sup>書</sup>

セケチ」の傍記に従う。 13、底本「戌」。他本に従う。

14、底本「東」。他本に従う。

廿八日 丙午 晴午刻参御前及暗退下宿廬戌刻束帶（心喪）

参御前女御参上後向陣被下解書二通参太相公直廬執筆着座後

向女御廬三位退出

別記 三位被免輦退出事

廿九日 丁未 師能奉令勘例和泉条事申文（依疾不持来）<sup>1</sup>奉

去年手書於法皇依例也去年正月弥陀仏百万遍今日滿了

別記 依服心喪不参除目事（禁中神齋）

（校訂）

1、底本「時」。他本に従う。